月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol. 125



その頃、分断されたスウィンと
ナーディアの前には……

創の軌跡 THE MISERABLE SINNERS

6月の花嫁はまさかの？

『英雄伝説 暁の軌跡』

ナユタ再び！
その時ザナドゥに何が？

も～っと集まれ！ファルコム学園

『軌跡』シリーズ始まりの
物語を振り返る

英雄伝説 空の軌跡

ファルコムニュース

選択肢によって展開が変わる!?　新システムの謎に迫る！

英雄伝説 黎の軌跡



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



発売まであと3ヶ月に迫ったカルバード共和国を舞台とした『軌跡』シリーズ最新作『黎の軌跡』。今回は、主人公・ヴァンに用意された新システムに注目！プレイヤーが選んだ選択肢によって、ヴァンのパラメーターや、ストーリー展開までもが変化する『LGC アライメント』とは……？

タイトル：英雄伝説 黎の軌跡　発売日：2021年9月30日
ジャンル：ストーリーRPG　対応機種：PlayStation4　プレイ人数：1人
小売価格：[通常版]7,800円(税抜)　[SPRIGGAN Edition]9,800円(税抜)
[ダウンロード版]7,500円(税抜)　CEROレーティング：審査予定

選んだ選択肢によって組む組織が変わる!? 新システム『LGCアライメント』とは？

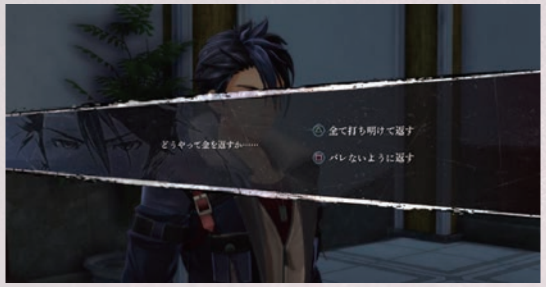
今回発表された新システム『LGCアライメント』は、これまでのシリーズにはなかった新要素にして、今作をプレイしていく上で大きな鍵を握りそうな注目ポイントだ。

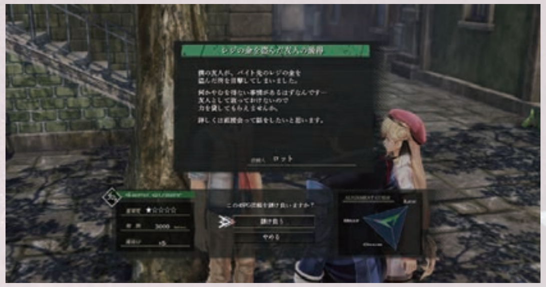
このシステムは、作中に多数登場する選択肢を選んでいくことで、ヴァンに設定された「LAW」、「GRAY」、「CHAOS」という3種類の属性値が変わっていくというもの。



この属性値に応じて、パラメーターが一部変化するほか、ストーリー中盤以降の展開や、《裏解決屋（スプリガン）》の共闘勢力、敵対勢力にも変化が生じていくようだ。「LAW」（＝法）が高い場合は《遊撃士協会》のように世間一般に知られている公的な組織との共闘が可能だが、「GRAY」（＝中間）、「CHAOS」（＝混沌）の属性値が高くなると……？

また、選択肢以外にもゲーム内でプレイヤーが取った行動により、属性値に変化が生じることもあるようだ。さらに、とある行動を取ることで、ヴァン専用のホロウコウア「メア」の性能にも変化が訪れるとのこと。今回は一部、このシステムに関する画像も到着した！









共闘勢力にも変化が!?







エレイン・オークレール

（CV：斎藤千和）　*Elaine Auclair*

年齢：24歳　武器：騎士剣

「今さら貴方の道にとやかく言わない――
でも、せめて"線引き"はきちんとしなさい。」

カルバード遊撃士協会において、最年少の若さでＡ級入りを果たした遊撃士のエース。
《剣の乙女（ソードメイデン）》の渾名を持ち、ヘーゼルブロンドの髪をなびかせた流麗かつ可憐、凛とした美貌は度々共和国内のニュースでも取り上げられており、モデルや女優のオファーまで来ているようだが本人は全て断っており、あくまで遊撃士としての道を貫いている。
名門校卒業後に遊撃士の道を選び、伝統的な剣術を嗜んでいたこともあって国内外で目覚ましい実績を積み上げ、若干23歳という若さでＡ級の資格をギルド本部から授与された。そんな折――かつての幼馴染であり、学生時代を共に過ごしたヴァンが首都イーディスに戻ってきたこと、そして、ギルドと対立しかねないような仕事を始めたことがエレインの胸をざわつかせるのだが……。

●武器設定画



●遊撃士協会エンブレム

カルバード遊撃士協会

「民間人の保護」を第一に掲げ、遊撃士（ブレイサー）と呼ばれる調査・戦闘のプロが各支部での依頼や要請、人助けなどを行う国際的な民間団体。
市民からは分かりやすい「正義の味方」としてその存在を認められており各都市に支部が存在する一方、組織としての融通の利かなさや"国家組織への不干渉"の原則に縛られるあまり、遊撃士だけでは対処しきれないといった問題も抱えている。
そんな中、戦後賠償による未曾有の好景気を迎えた共和国ではその富を目当てに猟兵団や犯罪組織等の流入が相次いだことで遊撃士が関わることのできない、"表沙汰"にできない案件が増加。
そういった案件に対し、《スプリガン》を名乗る"裏"の相談解決屋が高額な依頼料で対応するケースも発生しており多くの遊撃士がこの動きを問題視している。









ルネ・キンケイド

（CV：福山潤）　*René Kincaid*

年齢：25歳　武器：軍用拳銃

「相変わらずみたいだな――
持ち前のしぶとさを
最大限に活かすやり方は。」

ＣＩＤ（中央情報省）の統合分析室に所属する補佐官にしてエージェント。
有能な上司の下、大統領の狙いにより分断が起きている省内で上手く立ち回っており膨大な案件を日々処理しながら、現地での情報収集およびオペレーションを確実にこなす。
できる男のオーラと眼鏡をかけた怜悧で整ったルックスが印象的で、スーツ姿でスマートに仕事をこなす姿に心ときめかせる同僚女性は多数。
幼馴染のヴァンが《裏解決屋（スプリガン）》の仕事を始めたことには呆れつつも納得しているらしく、互いの立場を利用することにも躊躇しない。
一方で、同じく幼馴染のエレインが学生時代にギルド入りを決めた際は唯一の味方として彼女を応援し、ＣＩＤ所属の分析官となってからも遊撃士として活動するエレインのことを認めている。

CID／中央情報省

大統領府と連動してカルバード共和国内外で活動する情報機関。
共和国と暗闘を繰り広げていたエレボニア帝国が「帝国軍情報局」を立ち上げ、国内外の情報収集・オペレーションを開始したことを受け前大統領ロックスミスがＣＩＤの前身となる「大統領府情報調査室」――通称《ロックスミス機関》を設立。
２年にわたる試験運用を経て各組織から人材が集められ、「ＣＩＤ（中央情報省）」として正式に発足することとなった。
現在はグラムハート新大統領の就任に伴いＣＩＤが３つの"局"に分断され、すべての情報を大統領が掌握・コントロールする独裁体制へと再編されているが、そんな中、分断された省内の連携を取るために「統合分析室」という部署が立ち上がり新大統領直々の意向でＣＩＤ設立の貢献者、キリカ・ロウランが責任者として任命されることとなった。



●武器設定画



●遊撃士協会エンブレム



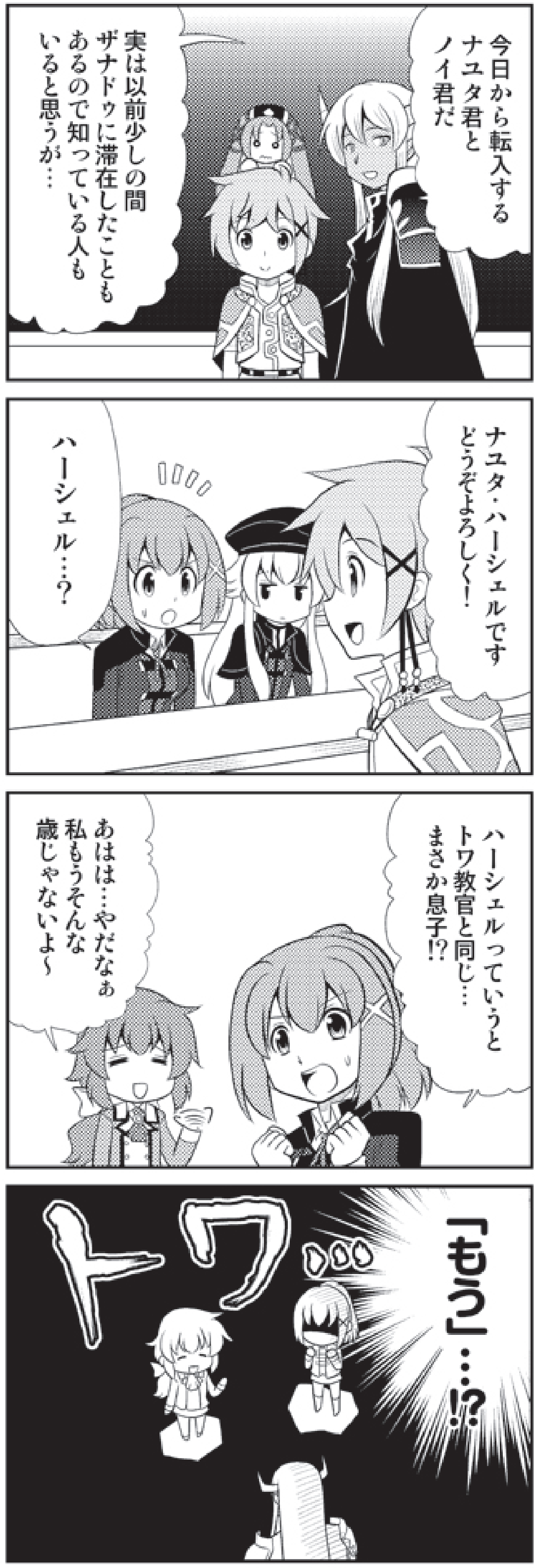




★夏が来るぞ～! 秋はまだか～!★



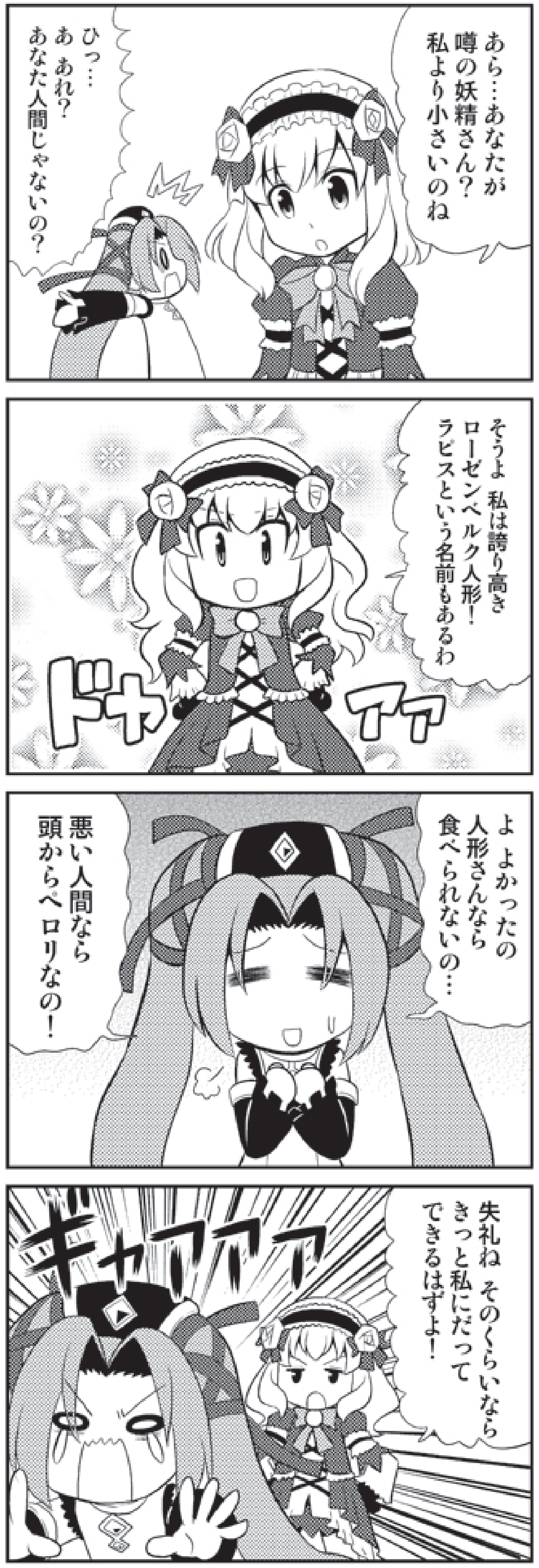
美魔女



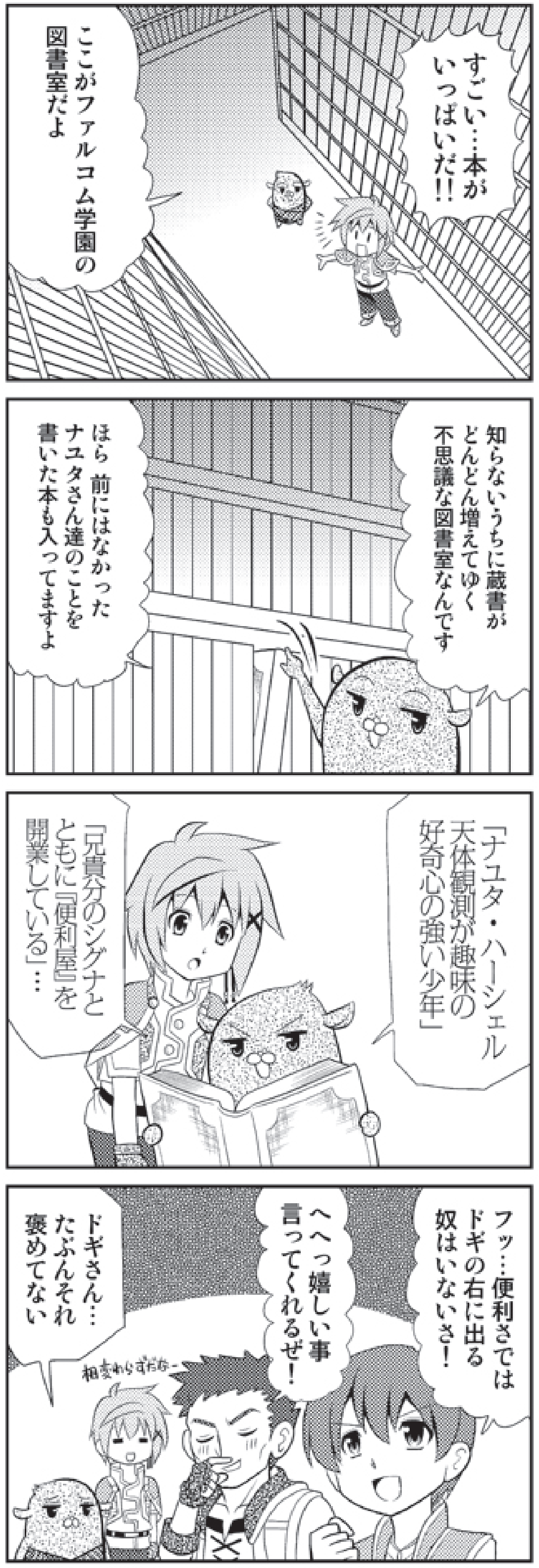
モテ弟の条件



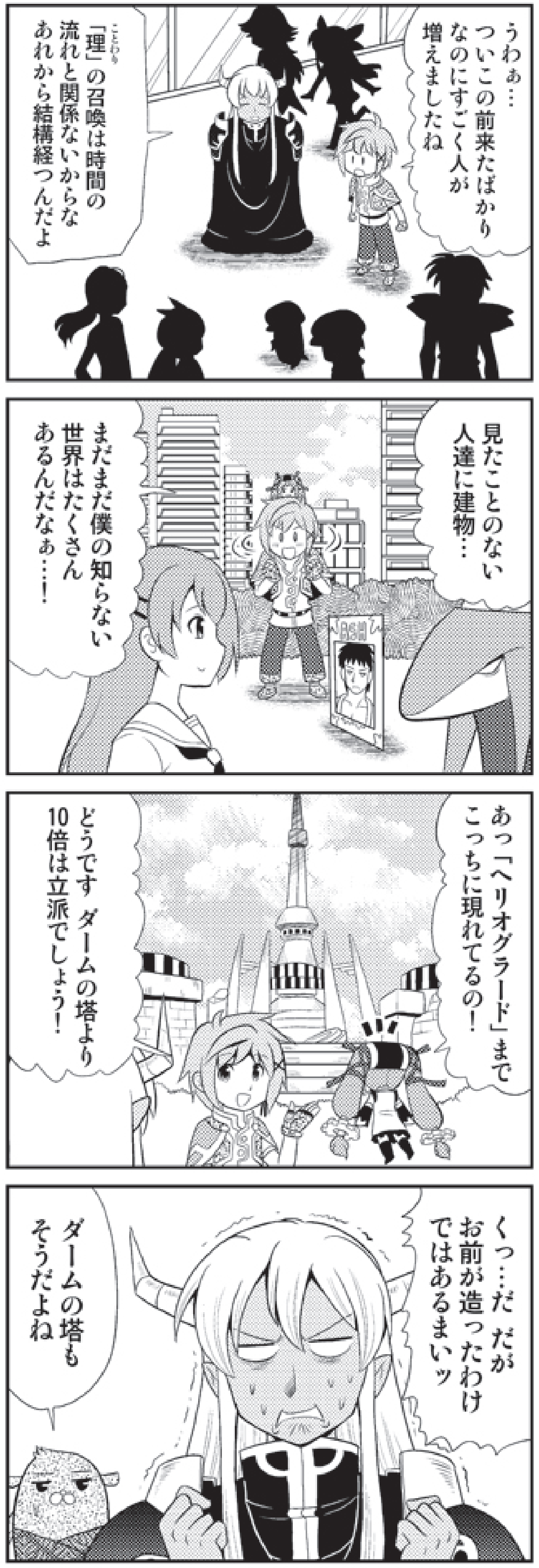
妖精と人形



便利な男



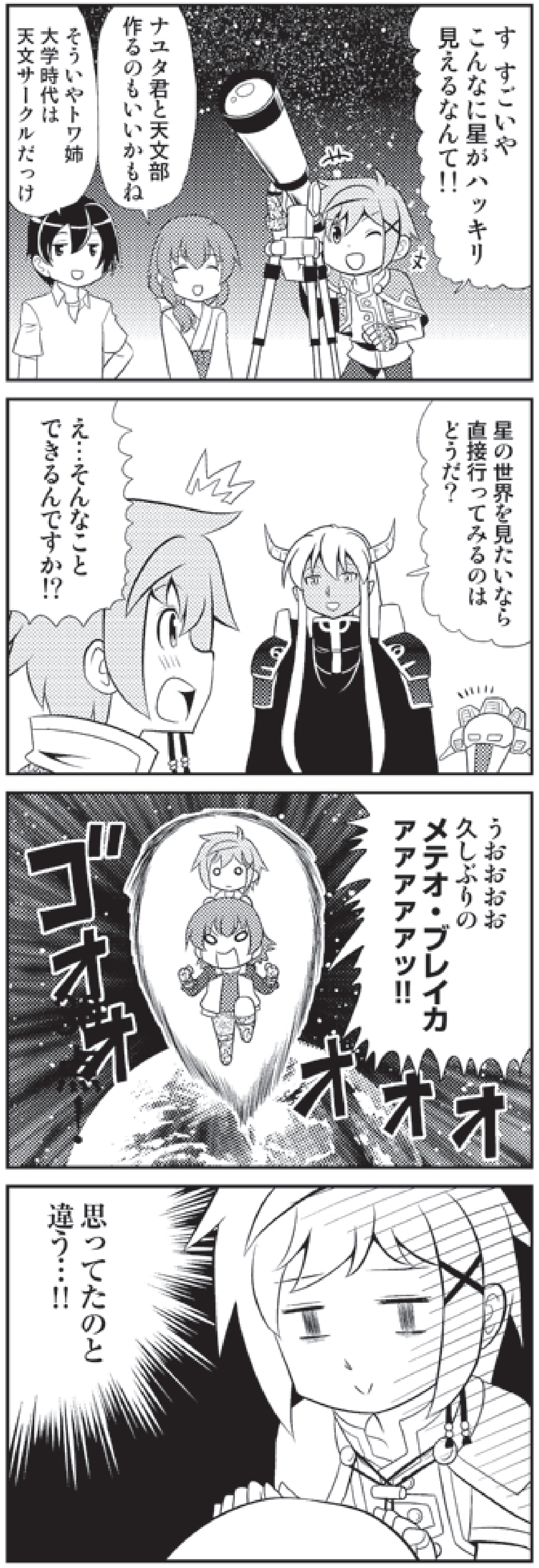
立派な塔



再会の約束



天体観測



異常気象



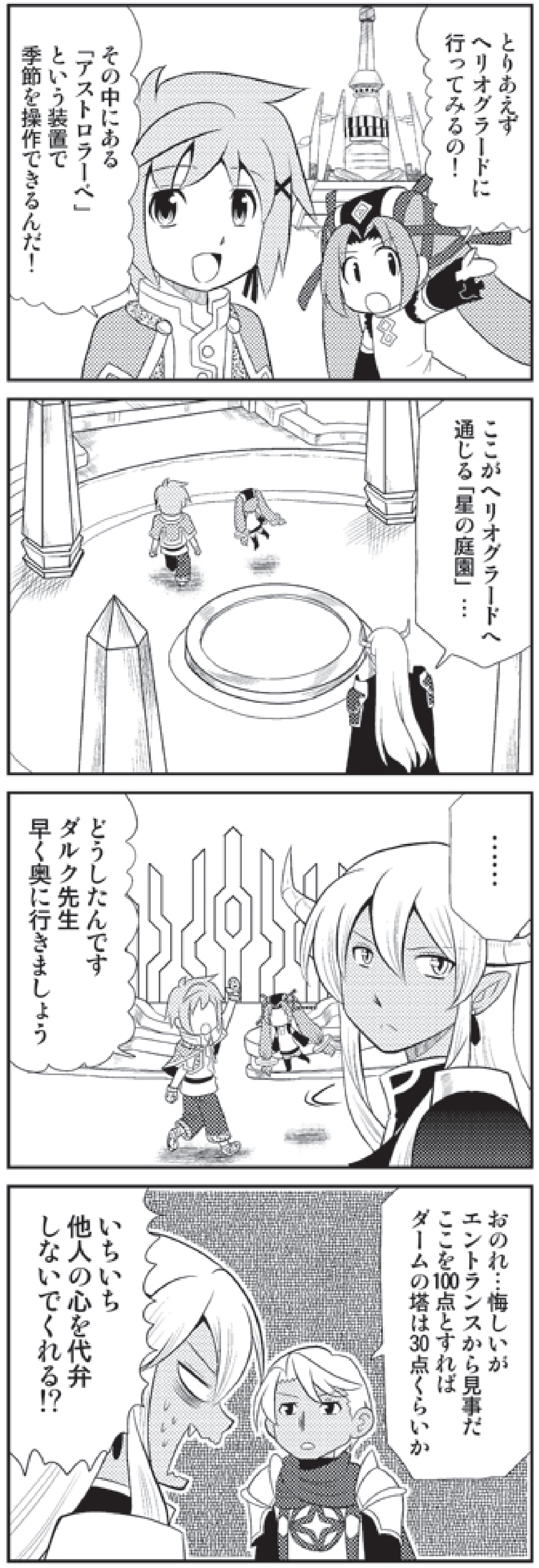
ナピシュテム



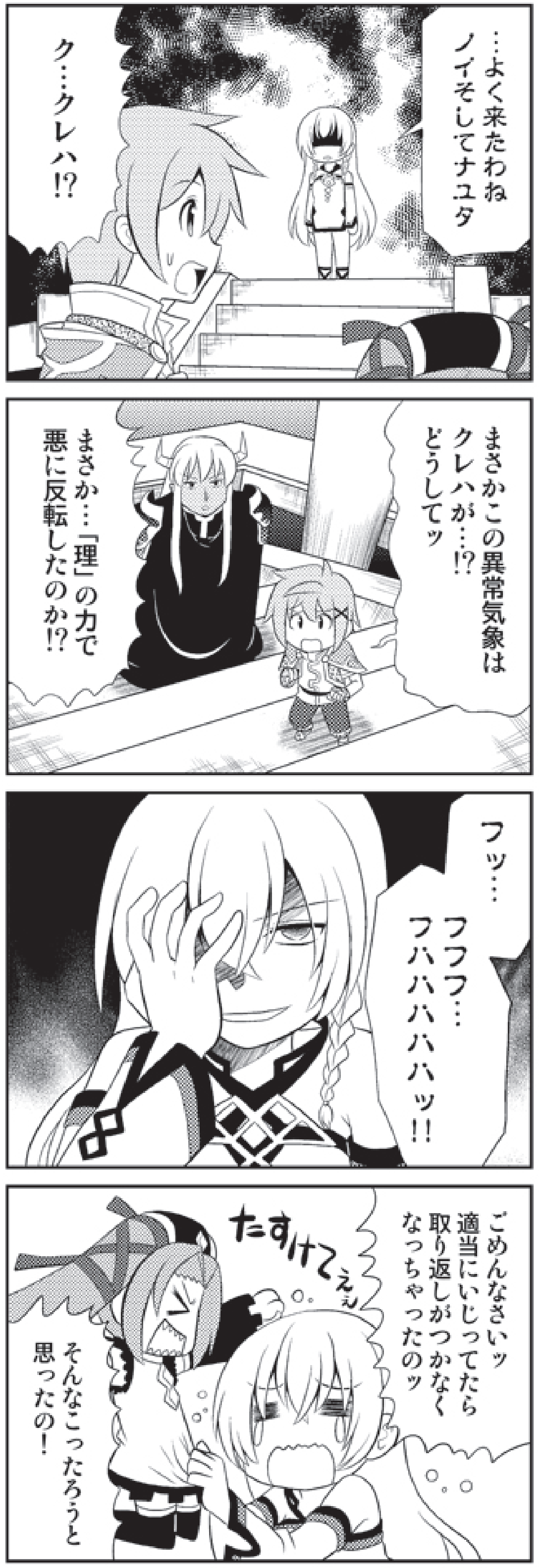
マスターギア



ダルク先生の採点



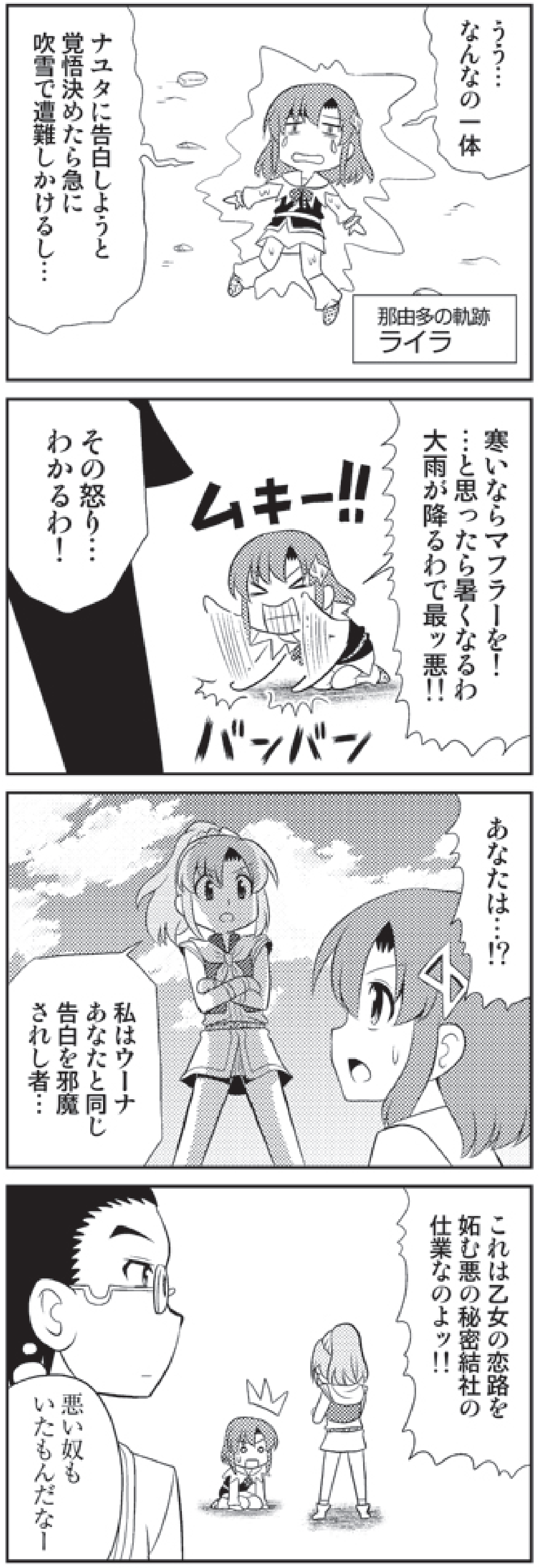
黒幕



クレハと理

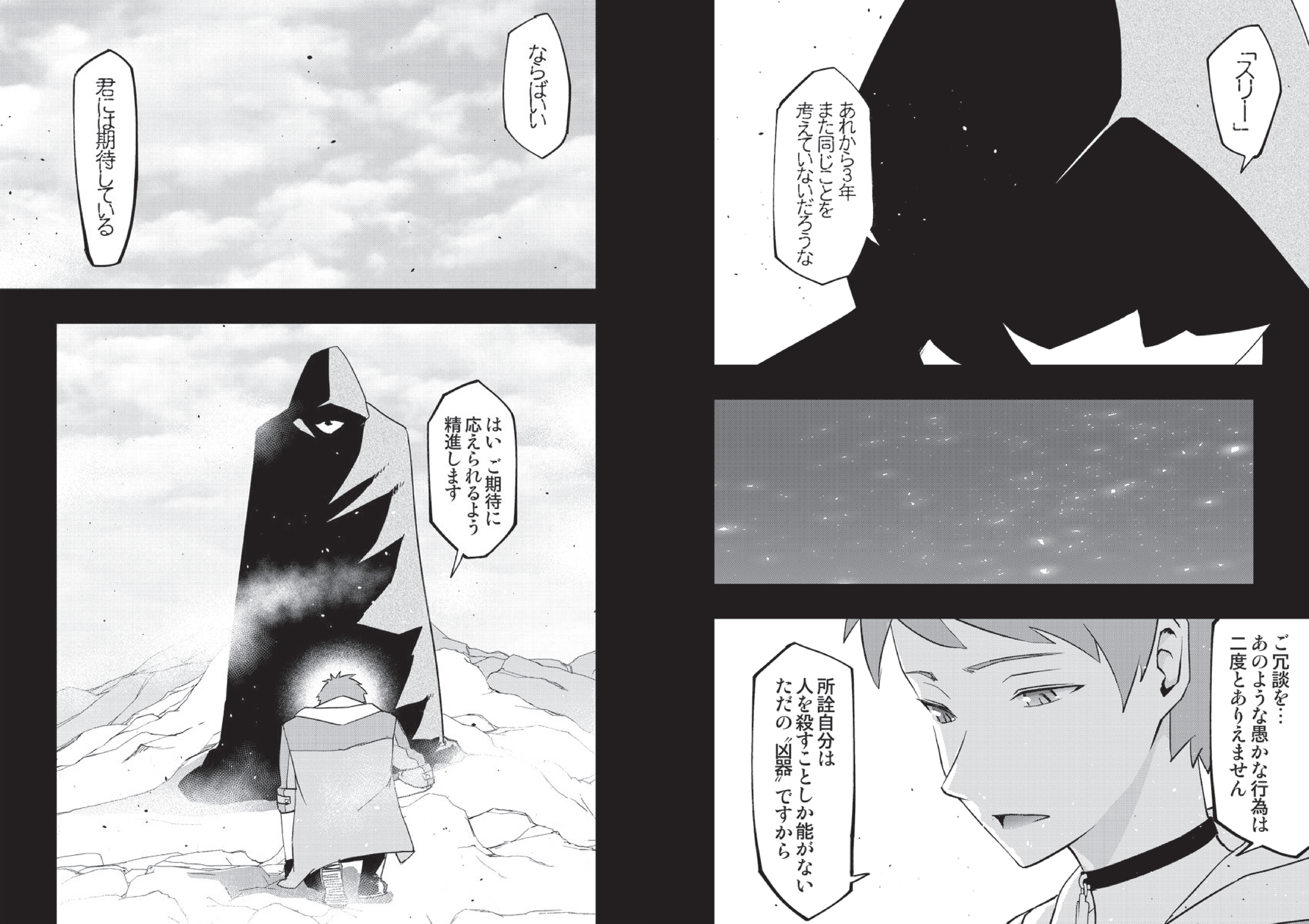


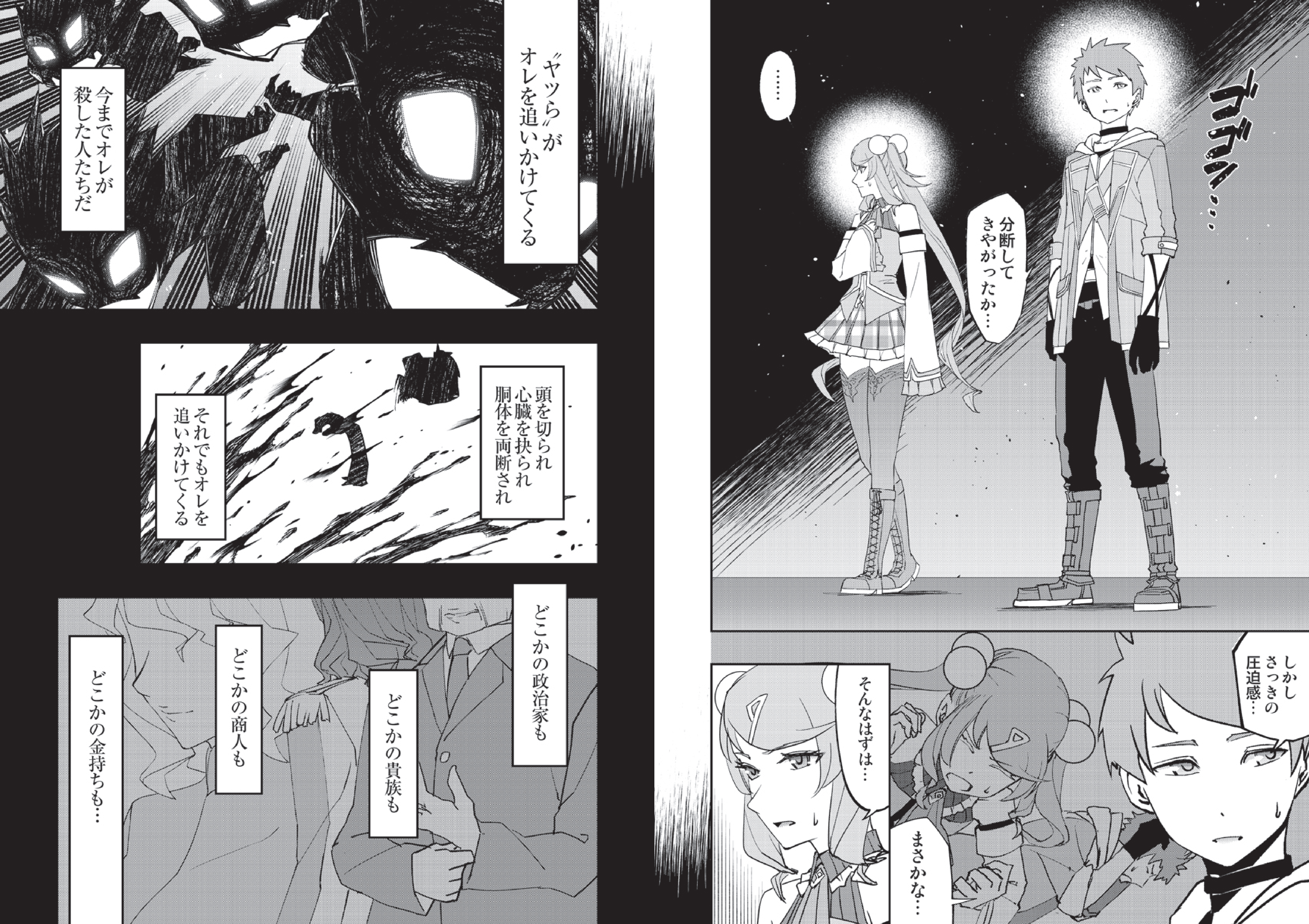
こじらせる乙女達

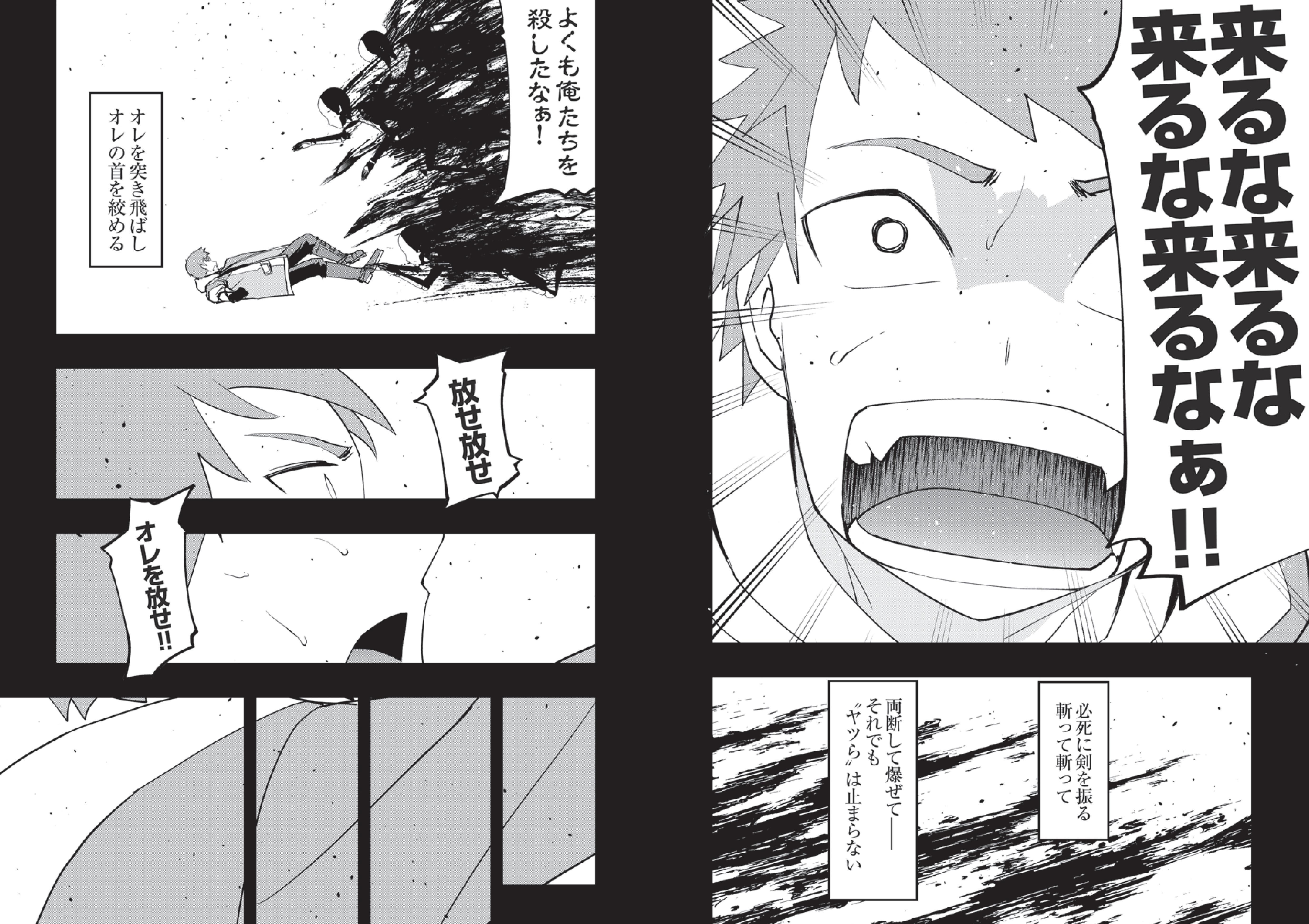


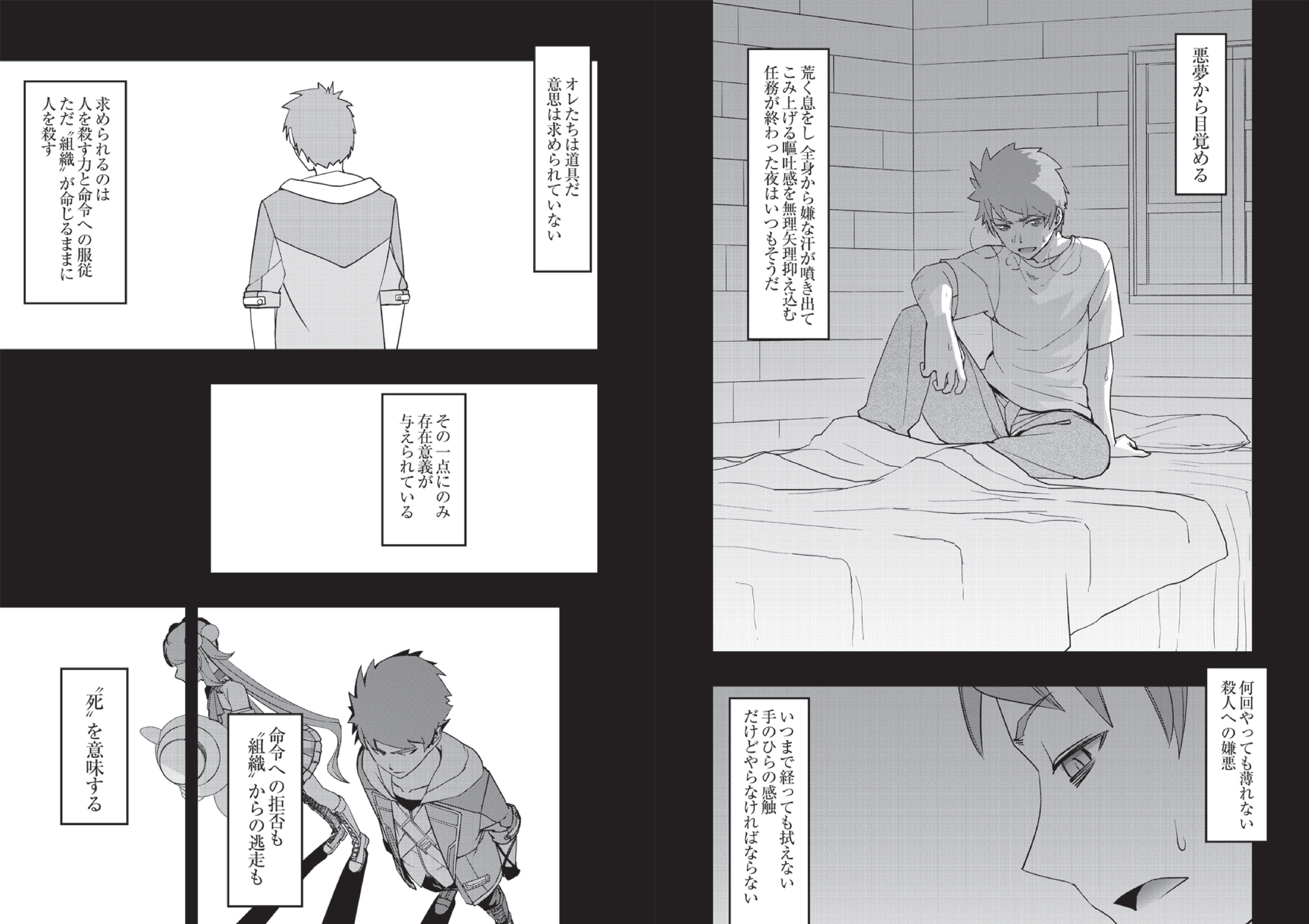

・・・ォォォオ
報告に参りました〝管理人〟
聞こうか


オオオオオ
THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】
THE MISERABLE SINNERS
漫画 墨天業
原作・日本ファルコム

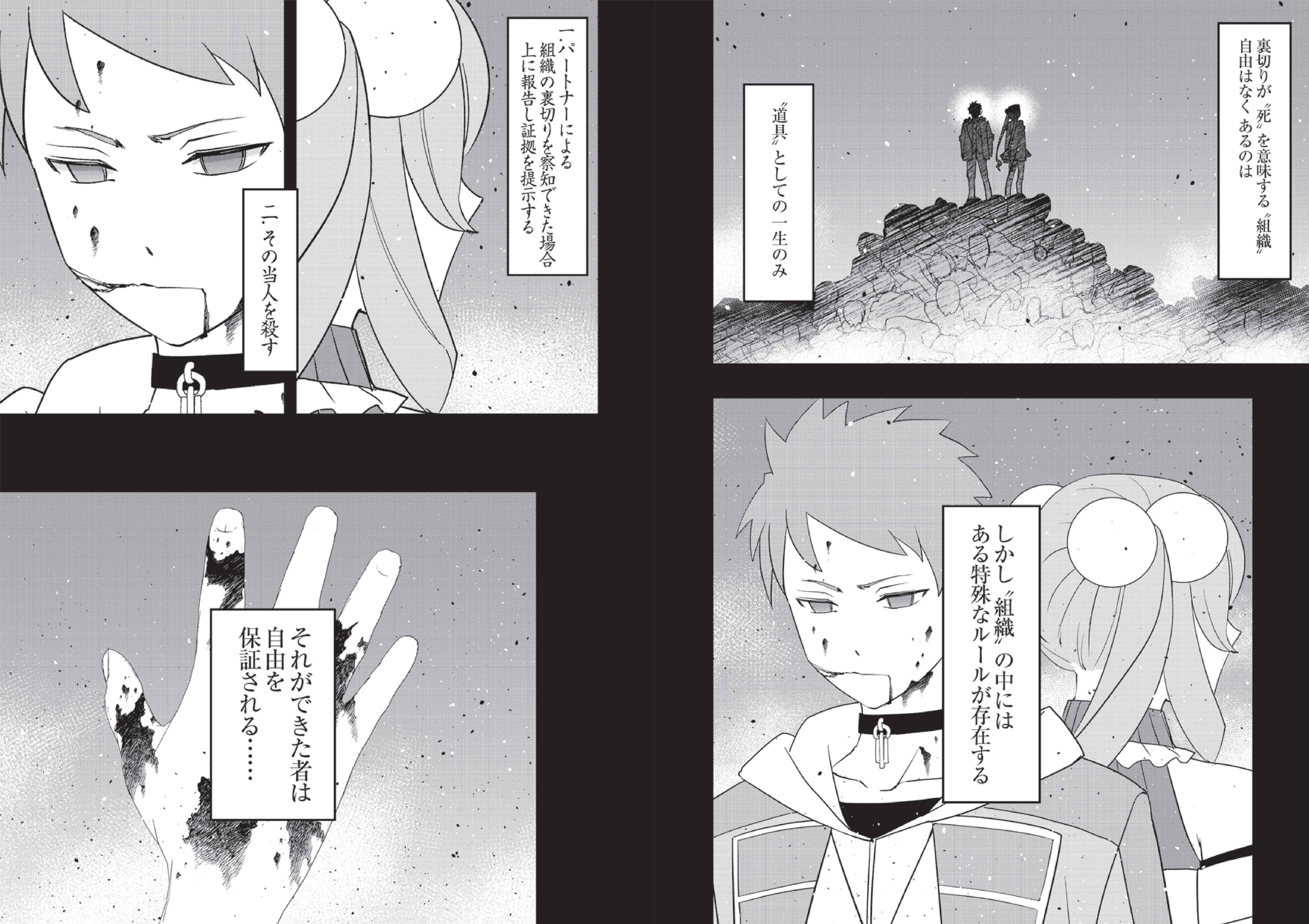

「スリー」
あれから3年 また同じことを 考えていないだろうな
ご冗談を… あのような愚かな行為は 二度とありえません
所詮自分は 人を殺すことしか能がない ただの〝凶器〟ですから
ならばいい
君には期待している
はい ご期待に 応えられるよう 精進します

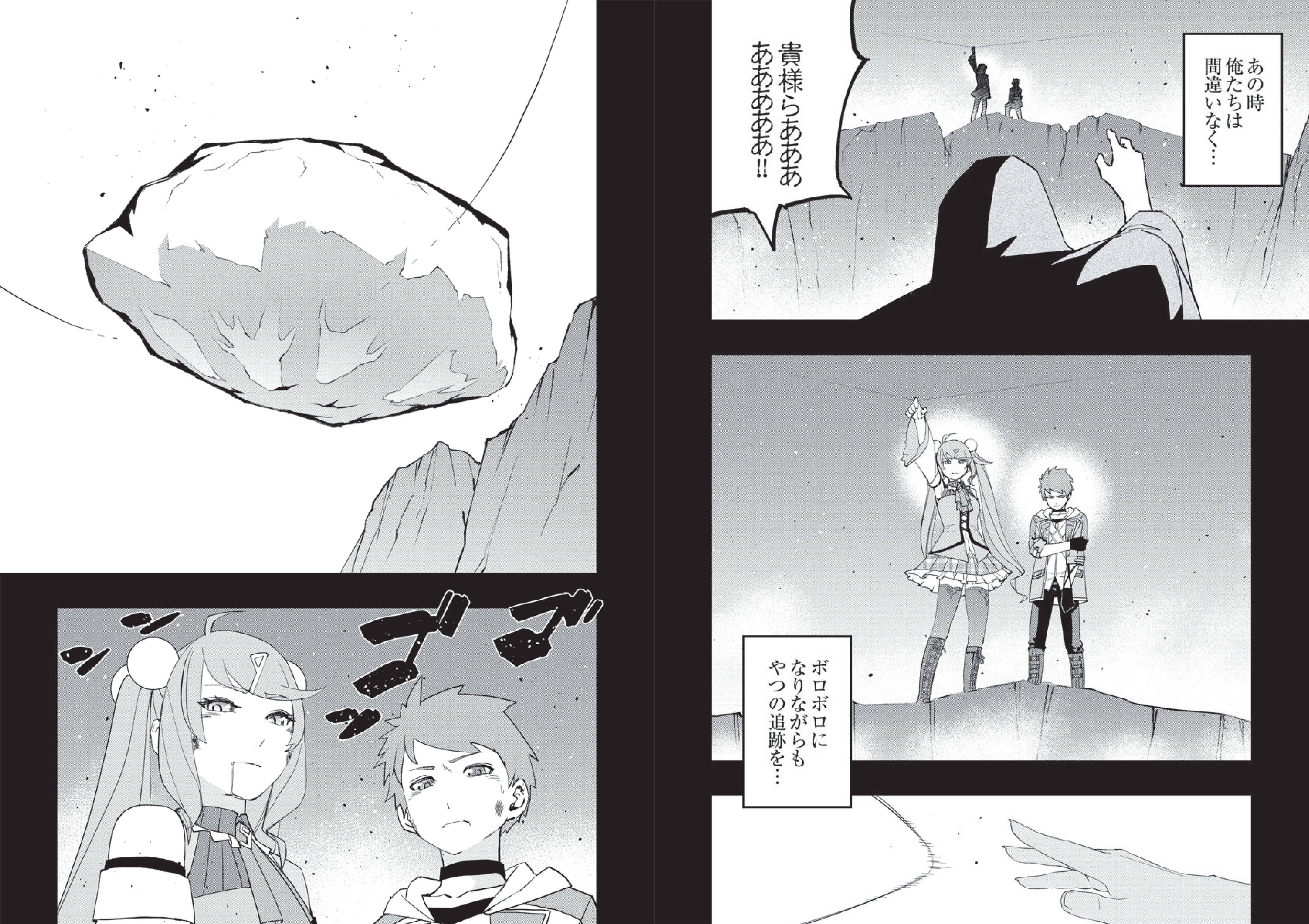

ゴゴゴ……
……
分断してきやがったか…
しかしさっきの圧迫感…
そんなはずは…
まさかな…
〝ヤツら〟がオレを追いかけてくる
今までオレが殺した人たちだ
頭を切られ心臓を抉られ胴体を両断され
それでもオレを追いかけてくる
どこかの政治家も
どこかの貴族も
どこかの商人も
どこかの金持ちも…

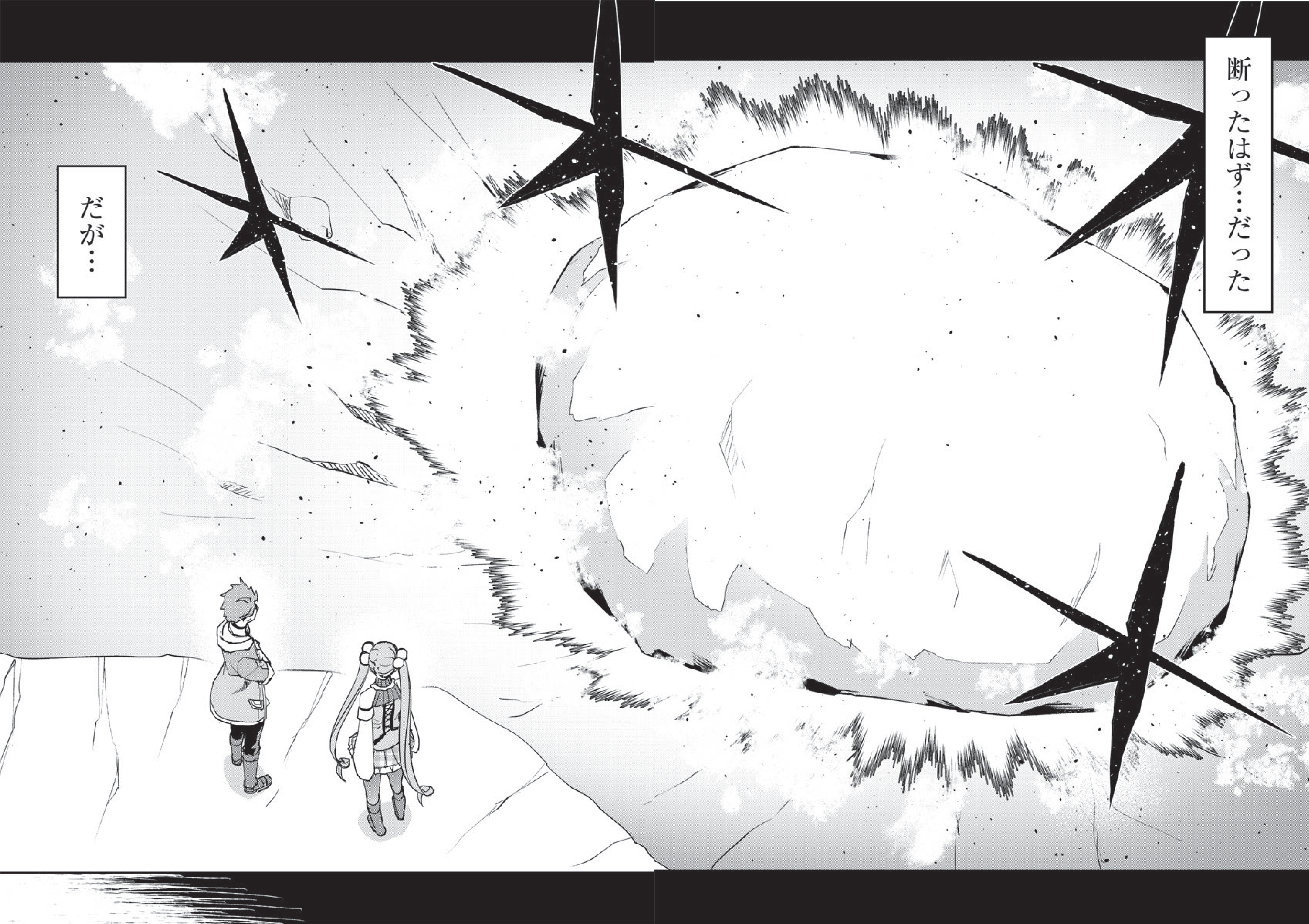

来るな来るな
来るな来るなぁ!!
必死に剣を振る
斬って斬って
両断して爆ぜて——
それでも
〝ヤツら〟は止まらない
よくも俺たちを
殺したなぁ!
オレを突き飛ばし
オレの首を絞める
放せ放せ
オレを放せ!!


悪夢から目覚める
荒く息をし全身から嫌な汗が噴き出て こみ上げる嘔吐感を無理矢理抑え込む 任務が終わった夜はいつもそうだ
何回やっても薄れない殺人への嫌悪
いつまで経っても拭えない手のひらの感触 だけどやらなければならない
オレたちは道具だ 意思は求められていない
求められるのは人を殺す力と命令への服従 ただ〝組織〟が命じるままに人を殺す
その一点にのみ存在意義が与えられている
命令への拒否も〝組織〟からの逃走も
〝死〟を意味する

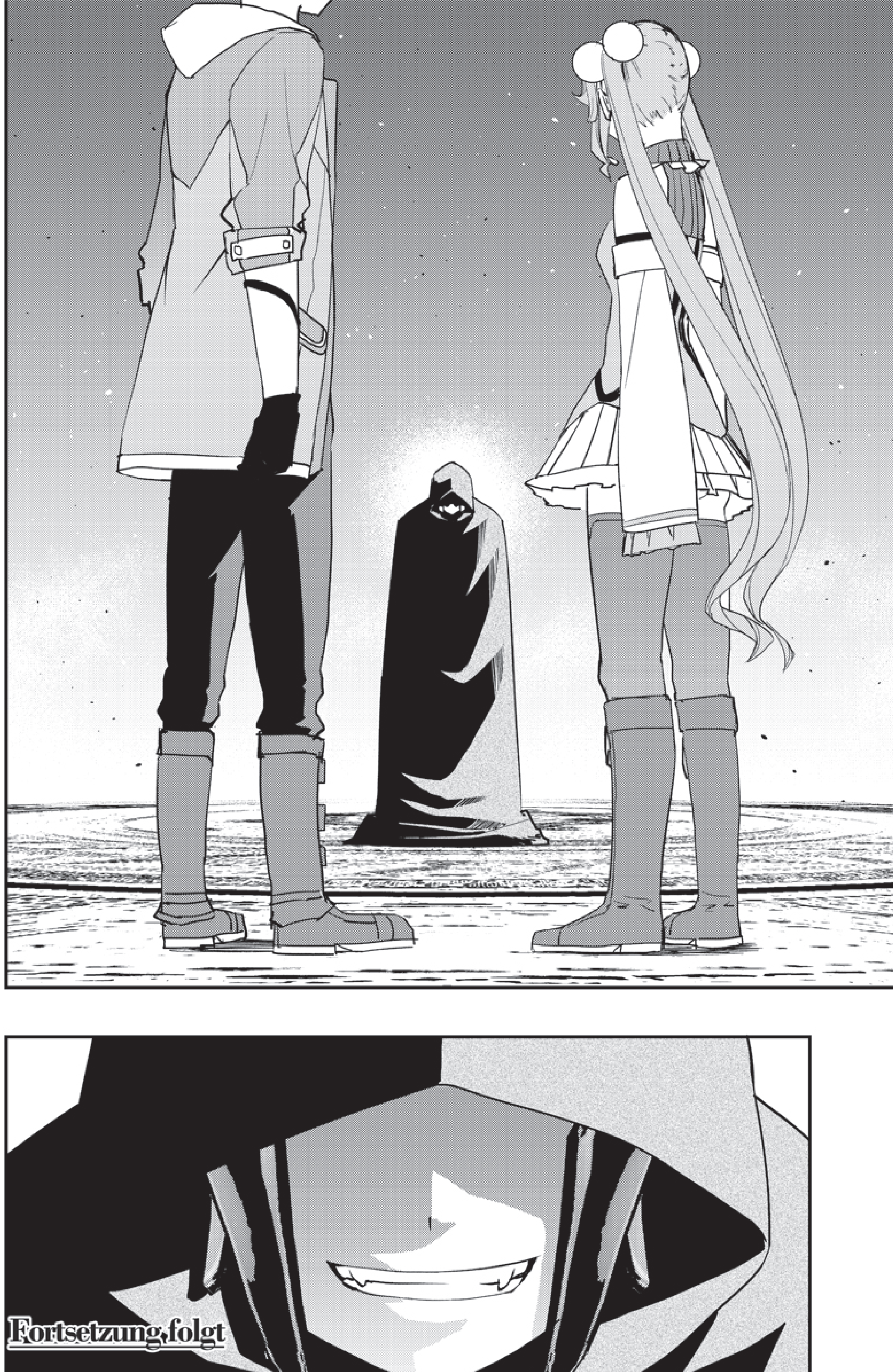

〝組織〟の下位構成員は基本的に二人一組で行動する
オレのパートナーはソードの9(ナイン・オブ・ソーズ)ひとつ年下の少女だ
通常3年から5年もしくは途中で〝脱落〟する〝養成所〟を1年で卒業した〝天才〟
情報収集 戦況分析 演技 潜入…あらゆる面で優れた才能を持ち
針と糸を武器とするその戦闘スタイルは対人戦で優位に立ち回れる
こと暗殺に関してはその適性はオレの比ではない
ある小さな国にすごく横暴な王様がいた暴君として君臨し悪政を敷き民から恐れられた
ある日 王様が死にその息子の王子が即位した王子 いや新王はとても優しい人で父の過ちを繰り返さないようよき政治をしようとした
しかし先王のように恐れられていなかったせいか誰も彼の言うことを聞こうとしなかった
暴君が生きていた頃は誰も文句を言わなかったのに先王が死んでから不満の声が上がりやがて革命が起きた
革命軍が王宮を攻め落とし新王に悪政の責任を問い国を共和制に改めた
優しい新王は命からがらですべてを失い国から追い出されたおしまい おしまい
つまりその王子が〝管理人〟なのか?
わからないよ~
そもそもそんな国があるかどうかもわからない~


裏切りが〝死〟を意味する〝組織〟
自由はなく あるのは
〝道具〟としての一生のみ
しかし〝組織〟の中には
ある特殊なルールが存在する
一.パートナーによる
組織の裏切りを察知できた場合
上に報告し証拠を提示する
二.その当人を殺す
それができた者は
自由を
保証される……


あの時
俺たちは
間違いなく…
貴様らあああ
あああああ!!
ボロボロに
なりながらも
やつの追跡を…


断ったはず…だった
だが…


『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に⁉
脚本家・山下憲一（TVアニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……⁉
あなたにお届け！
愛と希望の流れ星！
魔法少女
まじかる★アリサ
決定稿
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中！
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円（税別）／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks


Fortsetzung folgt

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

この夏を彩る新作グッズが目白押し！ 『英雄伝説 創の軌跡』の美麗なコースターや フェイスタオルなど新作グッズ発売!!

『英雄伝説 創の軌跡・軌跡シリーズ』の新作グッズがキャラ印.comより発売決定。第一弾で大好評だった白雲石コースターを中心に、こちらも好評のパズル、そしてフェイスタオルとマグカップなど追加アイテムが登場！
中でも白雲石コースターはちょっと大人向けのオシャレなイラストデザインが大好評。新たに『空の軌跡』のエステル、ヨシュアをはじめ、『零・碧の軌跡』のロイド、ランディたち特務支援課、『閃の軌跡シリーズ』のアルティナ、クルト、ユウナ、フィー、エマ、クロウと新旧Ⅶ組のメンバーの15キャラクターが追加され、全23種類に拡大しました。



【白雲石コースター】各1,320円（税込）

【パズル】3種／各4,400円（税込）



創の軌跡・夢幻の彼方へ



創の軌跡・Over The Darkest Hour



閃の軌跡・220期生ランチタイム

【フェイスタオル】5種／各2,750円（税込）



リィン　アルティナ　ミュゼ　クロウ　ワジ

さらにHOT-SHOTイラストを使用したフェイスタオル、マグカップがキャラ印の軌跡グッズ・新作アイテムとして登場。
イラストを大胆に使用したフェイスタオルは、発色に拘った仕様に。ひと際目を引くワジは、その美しくもかっこいい姿に見惚れてしまいそうな魅惑のタオルです。さらに、《閃》メンバーからはリィン、クロウ、アルティナ、聖アストライア女学院の制服を着たミュゼの可愛い姿など全5種類がラインアップ。

【マグカップ】4種／各1,650円（税込）



マグカップはコースターと合わせてグラデーションで色付けをしたアーティスティックなデザインを採用。リィン、クロウ、フィー、そしてルーファス＆ラピスの全4種類。ぜひコースターと揃えて並べて欲しいマグカップに仕上がりました。

■**販売ページURL**
https://www.charain.com/user_data/hajimarinokiseki

■**発送日**
受注生産のため当月中にご注文頂きましたお客様は翌々月末日までの配送となります。

※ご注文が集中した場合、受注を終了させて頂く場合があります。

国内数か所を巡回！『ファルコム創立40周年展』開催決定！

ファルコム40周年のお祝いイベントの開催が決定。未体験の方もファンの方も楽しめる、展示や応援企画、関連商品の販売、購入特典などを取り揃えて、皆さまのご来場をお待ちしております！



※社会情勢により開催時期、内容が急きょ変更になる場合がございます。予めご了承ください。
※イベントに関する情報は特設サイトにてご確認ください。

■**入場料**
無料

■**会場・開催期間**
7月22日（木・祝）～8月15日（日）
コスパ・トラベリング・デポinアトレ秋葉原【東京】

8月21日（土）～8月31日（火）
ジーストア大阪【大阪】

9月11日（土）～10月3日（日）
WonderGOO守谷店【茨城】

※仙台・名古屋・福岡地区でも開催予定

■**イベント特設サイト**
https://www.geestore.com/event/gallery/falcom40th/

『イース』シリーズより、『梅雨』をテーマにしたGraffArt新グッズが登場！

キュートな絵柄が魅力のGraffArtシリーズ。今回は日本の『梅雨』をテーマに「イース」シリーズから、アドルや歴代ヒロインたちが劇中では見ることのできないレインコート姿が登場！





■**店舗発売日**
7月3日（土）

■**発売店舗**
GraffArtShop池袋本店、なんば店、名古屋店

■**店舗情報**
http://graffartshop.athree3.com/

6月の 新／衣装替えキャラクターをチェック！



花嫁・シャロン

シャロンがまさかの6月の花嫁に!? シャロンがウェディングドレスの色として選んだのは純白ではなく漆黒。影に生きる者だからこそのチョイスだが、その結果、妖艶さをさらに引き立てている

ワンピース・レン

夏らしい純白のワンピースに身を包んだレン。帽子を被るイメージが少ないだけに、普段とはまたまったく違った印象を与えてくれる。その姿はまるで深窓のご令嬢だ

THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
6月は人気イベント「ナハトの奮闘記」が開催されたほか、
レンとシャロンの新衣装が登場！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

期間限定イベント「ナハトの奮闘記 Vol.12 レン編」を実装！

アルモリカ村から要請を受けたナハトは突然姿を消したハチを捜索することに。
しかし、相手は小さな虫。探す方法を思案していると少女が声を掛けてきた。
「美味しいハチミツが食べたいだけよ」と微笑む少女・レンとともに消えたハチの謎に迫る！









※画像は開発中のものです。　※イベントは終了しております。

助力を引き受けるつもりになったは良いが、肝心のジン本人に話を通す必要がある。
彼がエステルたちを仲間に入れてくれるかどうかはまた別問題だ。
（すごく、強かったし……足手まといって言われちゃうかも）
遊撃士協会の支部に戻り、エルナンにカルナたちからの提案について伝える。
「エルナンさんはどう思います？」
「打てる手はすべて打っておくという意味では試してみる価値はあると思いますよ。それと、たし

かにクルツさんたちに伝えるのは、彼らが優勝してからで良いでしょう。彼らの口が堅いことは保証しますが、戦いに雑念は禁物ですし。あなたたちは全力で挑戦してみてください」
「そう来なくっちゃ！」
「それで、ジンさんの行方を捜しているんですが……」
泊まっているのは大使館だと教えてもらう。
早速訪れてみたが、ジンは修行のために《エルベ周遊道》へ出かけてしまっていると聞かされた。
「さっきまで戦ってたのに⁉」
驚くエステルに大使館の門番は答える。
「帰ってきてすぐに出たッス。俺はまだまだ修行が必要だ、とか言ってたッス」
「ふええ」
驚くべき体力だ。もう夕方なのに、とエステルはそろそろ西に傾いた太陽を見ながら思ってしまう。
門番に礼を言ってから、エステルたちは門を出てエルベ周遊道へと向かった。王都に一番近い森で、あまり大きな魔獣も出ないという。森のなかには公園のように開けた草地もあるらしく、静かで修行にももってこいだと門番が言っていた。
ただし、森の奥にある《エルベ離宮》には近寄ってはならない。そう釘を刺された。
エルベ離宮は王家の建物であり、テロ事件の対策本部にするため、軍が立入禁止にしてるという。
（軍が、ね……）
王城を支配下に置いているのだから当然だろうと思われた。近づくと余計な騒動に巻き込まれそうだ。
門を出て、言われたとおりに歩いていると、森のなかを通り抜ける細い石畳の道になった。
緑の匂いが濃い。
狭い森のなかでは、夕暮れの日差しが立ち並ぶ木々の隙間からわずかに漏れてくるだけになり、気温が急に下がったように感じてしまう。あまり長くはいられないかもしれない。日が落ちる前に暗くなってしまいそうだ。
「へえ……ここがエルベ周遊道か。森の中なのに石畳があるなんて、ちょっと面白いわね」
「王都市民の憩いの場所として大昔に造られたみたいだよ。ざっと数百年は経ってるんじゃないかな？」
「さすがは女王様のお膝元ね。でもなんだか、魔獣の気配がするんですけど……」
こんな王都の近くでは大型の魔獣は出ないと思うのだが……。ましてや王家の建物の近くである。それでも、遊歩道の左右の森からは、かすかに剣呑な気配が漂ってくる。
「うん……。なんだかちょっと変だね」
警戒しながらエステルたちは道を奥へと進んでいく。
「いやああっ！」
声——いや悲鳴だ。女の人の！
「っ、ヨシュア！」

「奥の方だ。急ごう！」
近づくにつれて耳に障る、唸るような甲高い音が聞こえてきた。ブブブブ、と切れ目なく聞こえてくるのは大きな羽を忙しなく動かす音だ。
開けた場所に出た。
尼僧服姿の女性が道にうずくまっていた。
「シスターさん！」
「えっ……」
エステルたちの声に顔をあげる。よく見ると足首を手で押さえていた。
魔獣に襲われて逃げたところを転んで捻った――というあたりだろう。
甲高い音は頭上から降ってくる。
見上げると、人の身長の二倍ほどの高さに三匹の魔獣が羽ばたいていた。
巨大な蜂だ！
三つに分かれた節のある身体はひとの子どもほどの大きさがあり、青と白の毒々しい縞模様に塗り分けられていた。丸々と太った尻には、剣と見紛うほどの大きさの針が付いている。あんなもので刺されたら命に関わるだろう。
《丘陵蜂(ビー)》！
こんな低地にいてはいけない魔獣のはずだった。
エステルは声をかける間も惜しんで魔獣と尼僧との間に割って入る。

「うりゃあああああっ！」
目の前に降りてきた奴に思い切り振り回した棍を叩きつける。一撃、とはいかなかったが、羽の片方を粉砕し、よろけながら落ちてきた。
すかさず踏み込んで蹴りを放つ。
吹っ飛んでいって、そのまま下に落ちた。
「エステル！　針には毒がある。気をつけて！」
「判ってる！」
もう一匹が針をエステルに向けたまま突っ込んでくる。
（そうは――いかないのよね！）
すっと息を吸った。
身体は熱くなっていたが、頭が冴え、自分の集中力が高まるのが判る。
突っ込んでくる魔獣の姿がエステルには最後まできちんと見えていた。
ぎりぎりまで引きつけておいて半身になって躱した。身体の右側を蜂の針がかすめるようにして過ぎてゆく。
右肩を引いたぶんだけ左の肩が前に出る。身体に引きつけて持っていた棍もそれに応じて回転してゆく。蜂の巨大な複眼が顔の前を過ぎり、虫の魔獣に特有の、感情を感じさせない顔にぞくりと背筋を冷やしながらも、エステルは棍の根元に近いほうを相手の背中に叩きつけた！
羽ばたきがほんのわずかの時間だけ止まる。不快な音が消える。一瞬の静寂。

　だが、ふたたび羽を動かして蜂は浮き上がろうとした。
「ハッ！」
　自らの回転の勢いを止めることなく、もう半回転してエステルはふたたび混を魔獣に叩きつけた。地面へと撃ち落とすと、そのまま動かなくなった。
「ふん……なかなか手強かったわね」
　ヨシュアのほうはと見ると、彼も最後の一匹を丁度しとめたところだ。
「シスター、だいじょうぶだった？」
「はい」
　尼僧姿の女性はそう言って顔をあげる。
　エステルたちの顔を見て、なぜか驚いたような顔になった。こんな森の奥まで人が助けに来るとは思わなかったのかもしれない。
「あなたたちは……」
「僕たちは遊撃士協会の者です。ここで人を捜している最中に、あなたの悲鳴を聞いたので」
「そうでしたか……」
　俯いたシスターの声は疲れていて元気がないように聞こえた。
「あの……大丈夫？」
「はい。少し……足を挫いてしまっただけです。おかげさまで後はなんともありませんわ。あの……。私、グランセル大聖堂に勤めるシスター・エレンと申します。本当にありがとうございました」
　そう言いながら立ち上がって深々と頭を下げた。少し痛そうな表情こそ浮かべたものの、どうやら怪我のようなものはしていない。エステルはほっとした。
　尼僧服の頭衣で顔を半分ほど覆われているから、確かなことは言えないが、二十は越えているだろうが三十には届いてない。それくらいの年齢の女の人に見える。
　こんな森の奥のほうで女性が一人で歩いていては危ないのではないだろうか。
　そう指摘すると、薬草を探しに来たのだと言う。しかもエレンによると普段はこんなに魔獣が多くはないらしかった。
「あっ……！」
　シスター・エレンが何かに気づいたかのようにはっと顔をあげる。
　ヨシュアが腰の短剣をふたたび手に構えた。
「ま、またきた！」
　森の奥のほうから、先ほどまで聞こえていたあの羽音が聞こえてくる。
　ブブブブブ、と。
　先ほどよりも大きな音だ。
「げっ！　な、なによコイツら……！」
　やはり丘陵蜂だった。さっと目で数えただけでも九匹はいる。
「どうやら騒ぎを聞きつけて集まってきたみたいだね。さすがにこの数はやっかいだな」

目の前まで巨大な蜂たちが降りてくる。
睨み合いになった。
（いざとなったらシスターだけでも逃がさなきゃ……！）
そうエステルが思ったときだ。
「よう、お困りのようだな?」
木立の向こうから声がした。
直後にドシンという音とともに地面が揺れ、何体かの蜂が目の前からいっぺんに吹き飛ぶ。地面に叩きつけられて動かなくなった。
音は、足が地面を踏みつける音だった。
大きな背中がエステルたちの目の前に忽然と現れる。
エステルは息を呑んでしまう。

現れたのは、カルバード共和国の若き武闘家《不動》のジンだった。

† † †

加勢に現れたジンとともに、エステルたちは魔獣の群れを撃退した。
安全を確認し、ジンが構えをとく。ピリピリとした圧迫感が消え、エステルたちもほっと肩の力を抜くことができた。

「やれやれ……おかげで良い汗かいちまった。しかし、お前さんたちとここで会えるとは思わなかったぜ。ツァイスの方で仕事をしてたんじゃねえのかい?」
「あたしたちのこと覚えていてくれたんだ。でも、たしかにあれからあんまり経ってはいないかもね」
「僕たちが遊撃士だって気づいていたんですね」
「まあな」
「実は僕たち、ツァイス支部からグランセル支部に移ったんです」
「ほお、そうか。ってことは、ナントカ博士の誘拐事件のほうは解決できたみたいだな。あの毒をくらったっていう赤毛のアンちゃんは元気かい?」
「そこまで知ってるの!?　あ、うん、もうピンピンしてるわ」
「あの……」
シスター・エレンがおずおずと声をかける。
「おっと、こいつは失礼……」
「いえ、助けていただきまして、ありがとうございました」
エレンは深々と頭を下げた。
「いやいや、お気になさらずに。武侠に生きる者として当然のことをしたまでですよ！」
「なにを、かっこつけてるんだか……」
硬派に思えたジンの意外な一面をエステルは見てしまった。

「ジンさんも意外と女の人に弱かったのねぇ」
　エステルの脇でヨシュアも苦笑いだ。
　ほっとひと息をついていたときだった。
「お前たち、何をしている⁉」
　恫喝するような声とともに銃を構えた兵士が二人現れた。
（王国の……軍人⁉）
　エステルを庇うようにヨシュアが前に出た。
「何も……していませんよ」
　銃を降ろさずに二人の兵士はゆっくりと近づいてくる。まったく油断していない上に、この距離で銃を向けられてしまってはエステルたちにとりうる手段は抵抗をせずにいることだけだ。
「こんな人気のない場所で密談するとは怪しいやつらめ……」
「もしや……テロリストではないだろうな？」
「だ、誰がテロリストよ！」
　思わず言い返そうとしたところをヨシュアの背中で塞がれた。
「僕たちはグランセル支部に所属する遊撃士です。先ほど、こちらのシスターが魔獣に襲われていたので保護していました」
「なに……！」
「遊撃士だと⁉」

　兵士たちは遊撃士という言葉にますます警戒を強めたようだ。
　だが、二人を押しとどめるようにシスター・エレンがエステルたちを庇ってくれた。
　さらにジンも自分の正体を明かして説得にかかる。カルバードの《不動》のジンの名はどうやらグランセルでも知られているようで、二人の兵士は渋々ながらもエステルたちに対する追及を諦めた。
　用もなく近寄るなとは言われてしまったが。
「シスターどの。貴女のことは、自分たちが王都まで送っていきましょう。遊撃士風情の手を借りるまでもありません」
　尊大な口調で兵士たちは言ったが、シスター・エレンは微笑みを絶やさずにそれを受け入れた。
「では、お願いしますわ」
　シスター・エレンは頭を下げる。
　兵士たちの傲岸な態度に腹を立てたエステルだったが……。シスターがどうぞお先に行ってくださいというので護衛は彼らに任せることになった。
　別れの挨拶を交わしてエステルたちは街道へと戻る。
「あいつらは、軍の情報部に所属する特務部隊とかいう連中だな。腕は立ちそうだが、どうにも陰険そうな連中だねぇ」
　ジンもそう言ってくれて、少しだけ溜飲が下がった。
「っと、いかん。ここでこうしていると日が暮れちまう。早く街に戻ったほうがいい。ただでさえ、

このあたりは魔獣が出やすくなっているみたいだからな。……そういや、おまえさんたち、どうしてこんな処にいるんだ？」
「あ……。肝心なこと忘れてたわ。実は、あたしたちジンさんのことを捜してたのよ」
「あん、俺を？」
「実はジンさんに、お願いしたいことがあるんです」
ヨシュアが話を切り出した。
「武術大会のことなんですけど……」
「ほう。判った。だがひとまず街に戻ろう。夜のほうが魔獣どもは活発になりやがるからな。丘陵蜂どころじゃなくなる」
「う！　それはイヤかも……」
「俺もだ」
にっと笑うと、ジンはさっさと背中を向けて歩き出した。
「酒場にでも行こうか。メシはまだだろう？　食いながらゆっくり話をしようや」
周遊道から離れるとき、エステルは一度だけ振り返った。
王都の街並みはぐるりと森を周った向こうにある。黄昏の闇に一足先に没してしまった森は、黒々とした塊となって見えていて、遥か彼方の王城の尖塔の先だけが、そこから黄昏の空へと突き出してかすかに見えていた。
まるで闇の塊がグランセルの街を呑みこもうとしているかのようだった。

† † †

夜の闇のなかでも店の賑わいは止むことがなく。
酒場『サニーベル・イン』は、遊撃士支部とは小路を隔てた北側にあった。
店の奥の席に陣取ったエステルとヨシュアは、熊のような巨体を誇るカルバード共和国の遊撃士ジンと共に夕食を食べつつ互いを改めて紹介しあう。
それから、エステルは自分たちをジンのチームに加えてもらえないかと持ち掛けた。
「一つ聞いておきたいんだが、お前さんたちは武術大会になぜ出たいんだ？」
「えっと……予選を見てたら、身体がウズウズしてきちゃって」
「今までの修行の成果を試してみたくなったんです」
エステルたちの気持ちに偽りはない。ただ、もう一つの理由はあえて言わなかった。
支部のエルナンに相談したときにも言われたことだが、戦いに雑念は禁物である。
自分たちよりもはるかに強そうなジンには問題ないのかもしれないが、純粋に己の技量を確かめるために大会に参加しているジンに、余計な心労は掛けたくない。
「ふーむ……」
太い腕を組みながらジンは一瞬だけテーブルに視線を落とした。だが、すぐに顔をあげると白い歯を見せながら言う。

「いいぜ。一緒に組むとしようや」
「やったあ！　……って、即答しちゃっていいの？」
「ああ。お前さんたちの腕前は見させてもらってるからな。助っ人としては充分すぎるぜ」
「精一杯がんばるから！」
「よろしくお願いします」
「こちらこそよろしくな。しかし、最初は俺ひとりでどこまでやれるか試してみるつもりだったんだが。人数も揃った……となると、だ」
　ジンは店の給仕娘にミートパイのお代わりを注文してから、ぐいとテーブルに身を乗り出した。
「こいつは優勝を目指さないと話にならんな」
「モチのロンよ！　出場するからには優勝あるのみ！」
　エステルは拳を天井に向かって突き上げた。
「いい返事だ」
「でも、それならば、あとひとり欲しいところですね。大会の規定は四人。全力を尽くすつもりなら、この先の試合を考えるとひとり少ない差は大きい……」
「うーん。でも……」
　そもそも、そうたやすく参加者が見つかるならば、ジンとて単独参加などしていないだろう。王都に身体の空いている遊撃士の当てがないことはもう判っている。
「そこは気合で乗り切るしか！」

「みんながエステルじゃないんだよ？」
「ど、どーいう意味よ！」
「まあまあ。たしかに兄さんの言うとおりではある。優勝を口にするんだったら、準備の段階で万全にしておくのは当然のことだ。戦いってのは拳を交える前から始まってるんだぜ」
「う……で、でも、明日にはもう次の試合があるんでしょ？　今から探すなんて無茶じゃない？」
「それも判ってる」
「でしょ！　頭数をそろえるだけなら、誰でもいいんだけど。でも、ふつうの人じゃ怪我しちゃうわよ。武術大会に出てくれる人なんて――」
　そうそういるわけが……と言いかけてエステルは口をつぐんだ。
　弦のほろりと鳴る音とともに覚えのある声が聞こえてきた。
「フッ……お嬢さん、いま誰でもいいとか言わなかったかい？　その言葉を待っていたよ」
「こ、この声は……」
　背後から聞こえてくる声にエステルは心のなかで冷や汗を流した。目の前のヨシュアの呆れたような顔を見れば、振り返らずとも声の主が判ってしまう。
　店の二階へと続く螺旋の階段を下りてくる靴音。歩きながら奏でているのだろうリュートの音。笑みを含んだような軽やかな声がそれに重なる。
「フフフ……余すことなく聞かせてもらったよ」
　エステルは振り返って声の主に指を突きつけた。

「出たわね、このスチャラカ演奏家！　なんであんたってばどこにでも湧いてくるのよ！」
「舞台の幕があがれば役者はいつだってそこにいるものだよ？」
　言いながらリュートを抱えた青年はエステルたちのテーブルまで歩いてくると、ちゃっかりと空いている席に座った。
「あ、こら！　なに勝手に座ってんのよ！」
「ヤボなことを……フフ、ボクと君たちの只ならぬ仲じゃないか」
「誤解を招く言い方やめい！」
「ふむ。兄ちゃん、いつもここで店のピアノを弾いてたな」
　弦楽器を抱えた青年に向かってそう言ってから、ジンはエステルたちのほうへと顔を向ける。
「お前さんたちの知り合いかい？」
「どっちかってゆーと、腐れ縁ってやつね」
「まだ知り合ってそんなに経ってないのにね」
　エステルとヨシュアの疲れたような顔に気づいてか気づかずか、リュートの青年はジンのほうへと向き直ると自己紹介を始めた。
「ボクはオリビエ・レンハイム。エレボニア出身の漂白の詩人さ」
　リュートの音の主はオリビエだった。他にいるわけがない。
「ジン・ヴァセックだ。カルバード出身の遊撃士で武術(ウーシュウ)の道を志している。あんたのピアノには、いつも楽しませてもらってるよ。リュートも上手いもんだな」

「フフ……お誉めにあずかり光栄至極。ボクの方も、大会予選でのあなたの武勇は耳にしている。たったひとりで参加し、素晴らしい活躍だったそうだね、《不動》のジン」
「運が良かっただけさ」
　ジンは、そうさらりと流したのだが、もちろん運だけで勝ち残れるほど王都の武術大会は甘くないだろう。
「オリビエってば、シェラ姉と一緒に飛行船に乗ってロレントの方に行ってたわよね？　いつから王都に来てたのよ？」
「フフ、ボクのことがそんなに気になるかい？」
「そこは別に。どうせ、シェラ姉の酒に毎晩付き合わされた挙句、たまらず逃げ出した、とかでしょ？」
　エステルの指摘は図星だったようだ。ぎくりとオリビエは身をすくませる。
「あと、そうね。アイナさんにまで酒を付き合わされちゃったとか？」
　ロレント支部の受付をしているアイナを思い出しながら、エステルは畳みかけるようにオリビエを問い詰めた。
「あのね。アイナさんはシェラ姉以上の底なしだからね？　あの人に付き合って呑んだら、口説く前に自分がつぶれるわよ」
　そういう不埒な男たちを何人も見てきたのだ。
「ハハハ……ナ、ナンノコトカナ」
「声が裏返ってるし」

「エステル、そのくらいにしてあげようよ」
ブツブツと壁に向かって呟き始めたオリビエを見てヨシュアが言った。
「まあ王都に来た理由はなんでもいいさ。で、俺たちに何か用かい？」
ジンの問いかけにようやく現実復帰を果たしたオリビエが答える。
「もちろん。ここにか弱き乙女が困っているのだからね。ボクとしては手を貸さずにはおれないわけさ。ボクが最後のひとりとして君たちの仲間になるってのはどうだい？」
「ほう。武術大会に出たい、と」
「フフ、そういうこと。可憐な少女の涙を止めるためならば、この身などいくらでも捧げようじゃないか」
「またそーいう……。で、本音は？」
「観光に飽きた」
「正直ですね……」
ヨシュアが呆れた声になって言った。
「それに優勝すれば豪華な晩餐会へのご招待……まさに女神の天啓といえようっ！」
「ふうむ。ま、いいんじゃねえのか？」
「ちょ、ちょっとジンさん。そんな簡単に……」
「いや、この人なら大丈夫だろ。お兄さん、得物は導力銃だな。それなら戦うときの戦術の幅も広がるし、いい組み合わせだと思うがね」

ジンの言葉にエステルはえっと驚いたのだ。
オリビエの戦いを、まさかこの人は見たことがあるのだろうか、と。当のオリビエ自身も驚愕に目を瞠っている。
「これは……驚いた。やはり脇の下に吊るした銃の膨らみと歩き方かな？」
「それと、視線の動かし方だな。俺たちみたいな近接戦闘の武術家は動く相手を線で捉えるもんだが、あんたは点で捉えている。そいつは銃使いに特有の視線だ」
ジンを、自分よりも何段階も上手の武術家だとエステルが真に感じたのはその時だった。
自分にはまだ判らない遥かな高みがあるのだ。
「フム……ボクもまだまだだね。今後そのあたりも気を配るとしよう。で、ボクは合格ということでいいのかな？」
「ああ、よろしく頼むぜ」
ジンはそう言ったのだけれど、正直エステルは少し不安だ。
けれども、他に頼る当てもない。エステルたちは結局オリビエを含む四人で武術大会の本戦に臨むことになった。

† † †

その夜は『ホテル・ローエンバウム』という立派な宿泊所に泊まることができた。

協会支部のエルナンが部屋を取っておいてくれたのだ。
眺めのいい二階の部屋だった。
窓を開ければ、王都の夜の街並みが一望できる。東の、太陽が昇ってくるほうに王立競技場（グランアリーナ）が見てとれる。夜だというのに明日の準備だろうか導力灯の夜間照明が煌めいていた。
壁の向こうで見えないが、北側に窓があれば、あれだけ大きかったのだから王城もきっと見えるはずだ。
（あたしたちが会おうとしている女王様は、病気で静養しているのよね……）
おそらくは城のどこかの部屋でとっくに休んでいるはずだが。
「これからしばらくこの部屋にふたりきりか……」
「えっ！」
ヨシュアの言葉にエステルはどきりと心臓が跳ねてしまった。
「え？　でも、せっかくエルナンさんが取ってくれたんだし、そりゃ、こんな高そうなホテルの滞在は君には肩が凝るかもしれないけどさ」
「あ、そ、そうよね。そうそうそう」
（って、あたしってば、何を考えてるのよ〜〜〜）
何を動揺しているのかとエステルは自分で恥ずかしくなってしまう。今までだって旅のなかで二人きりで何度も同じ部屋に泊まってきたではないか。
「あのさ、エステル」

「ひゃい!?」
「ふう。どうしたのさ」
「な、なんでもないわよ！　うん」
ヨシュアがため息のような吐息をついた。
「……エステル、僕たちは家族だよね。だったら、心配ごとがあるなら話してみてくれないかな……」
「ヨシュア……」
自分の態度がヨシュアを不安にさせているのだ。
エステルにはそれが判ったが、そもそもどうしてこんな態度をとってしまうのか、自分のほうが知りたいくらいだった。
「あ、あのね……」
恐る恐る切り出すエステルの言葉を、ヨシュアは急かさずに黙って待っていてくれる。ヨシュアはいつだってそうなのだ。
「その……深刻な悩みとかじゃないから。ちょっとだけ気持ちの整理がつかないっていうか……だからその……」
「うん」
「もう少しして気持ちの整理がついたら、きっと話すから。っていうか、たぶん話さなくちゃならなくなるっていうか……って、あのその」

「判った」
「へ？」
「待つよ」
「あ……うん。うん、あの……ありがとう」
「じゃあ、そろそろ荷物の整理をして休もうか。明日は試合もあるし」
窓の向こう、夜空の星のように煌めく王立競技場の夜間導力照明へとちらりと視線を送ってから、ヨシュアは旅の荷物の整理を始めた。

† † †

本戦に残っているチームは八つで、だから今日の試合は四試合あるが、対戦相手は試合直前まで判らない。
賭博行為を防ぐためらしかった。ただし、参加者は自分の控室に誰がいるかで、ある程度の把握はできてしまう。
「たしか試合って正午から始まるのよね」
昨日訪れた西の控室ではなく、エステルたちは東の控室で待つよう指示される。
控室に居たのはカルナの所属しているクルツがリーダーを務めるチームと、王国軍に所属するチーム。そして国境警備隊の隊員たちから編成されたチームだ。
クルツたちのチーム以外の人物には、さすがに見知った顔はなかった。
第一試合はクルツたちの試合だった。
導力拡声器が対戦するチームの名を呼ぶ。
場内を拍手の音が鳴り響く。昨日よりも拍手の音が大きかった。本戦に入ったからか観客の数も増えたみたいだ。
「あ、始まるみたい！」
「ここからも覗けるみたいだね」
すり鉢状になっている観客席から見下ろすよりも見難いが、隙間から何とか見てとることができそうだった。
クルツのチームの戦う相手は王国軍の士官たちで構成された四人組で、あまり心配することもなく順当に勝った。
「フフ、さすがだな。揃いも揃って大した腕前だぜ」
ジンとオリビエが感心している。自分のことのようにエステルは誇らしかった。
続いて第二試合。
ここでエステルたちのチームが呼ばれた。
対戦相手は――《レイヴン》の四人組だ。どうやら二チーム出場していたらしい。
この四人もルーアンの倉庫でアガットに一撃で叩き伏せられた相手だったのだけれど、思った以上に手強かった。

彼らは彼らなりにあれから修行を積んでいたようだ。

それでも余力を残して勝つことができたのはジンのおかげと……少し不本意だけれど、オリビエの力があればこそだ。導力銃の腕前だけは大したものだと思ってしまう。

負けた《レイヴン》の四人組は悔しそうにしていたが、なんだかすっきりした顔もしていて、エステルはほっとしてしまう。もう悪さもしないだろうと思えた。

控室に戻り、その後の対戦も見守る。

三試合めに西側から現れたチームにエステルは驚きを隠せなかった。

男三人に女の子一人の組み合わせ。

「あの人たち、見たことある……！」

ヨシュアが言った。

「《カプア一家》だね。ほら、あの女の子はジェニス王立学園の偽学生を演じていた子だ」

エステルの父が乗るはずだった定期飛行船を奪って、身代金を要求してきた空賊団だ。

捕まったはずの盗賊団である。なぜ王都の武術大会にいるのか。

その答えは導力拡声器から流れる女性の声が告げてくれた。

『ご存じの方も多いと思いますが、彼らはボース地方を騒がせた空賊団《カプア一家》の者たちです』

彼らは武術大会を盛り上げ、迷惑をかけた王国市民に償いたい、と参加を希望したのだという。

常ならば、そんな希望が通るはずもないが、今回の大会の主催者はあのデュナン公爵である。

『主催者である公爵閣下の計らいで今回の出場が実現した次第であります』

拡声器の告げる事情を聞いてジンは呆れ、オリビアは笑い出した。

しかも空賊たちのチームは王国軍から選抜されたチームに勝ってしまった。

さすがにこれは笑えない。もし彼らが優勝してしまったら、宮廷晩餐会はどうなるのか。本当に招待するつもりなのか。

だが、さらに驚くべき出来事がその後の試合に待っていたのだ。

四試合めに西の控室から出てきた四人組は、王国軍情報部の特務隊に所属する者たちだったのである。つまり今回の事件で暗躍している当事者たちだ。しかも、チームを率いている人物は赤い仮面を被った男――レイストン要塞でリシャール大佐たちの元へと何かを報告にきた男だった。『ロランス少尉』、と拡声器の声は男の名を告げていたから間違いない。

「あいつってば、なんでしゃあしゃあと武術大会なんかに出てきてんのよ！」

ぎりっと奥歯を噛みしめる。

あいつらこそがラッセル博士を誘拐し《黒の導力器(オーブメント)》と《カペル》を奪ったのだ。

「隠れる必要がなくなったっていうことかも……」

ヨシュアがエステルにだけ聞こえるように呟いた。

試合は一方的だった。

ロランス少尉の率いるチームは強く、対する相手は王国の国境警備隊からのえり抜きだというのにまるで歯が立たない。呼吸一つか二つの間に、大勢が決していたと言っても過言ではない。しかも、大会に初日から参加していたジンの言葉によれば、ロランス少尉は本戦からの登場だという。

それまでは彼を除く三人で戦って予選を突破してきたわけか。エステルは彼らの強さに衝撃を受けたのだ。

　少尉の得物は大剣で、剣を振る動きがあまりに素早くて、エステルでさえ目で追いかけるのがやっとだった。

「……今の太刀筋……は………」

　エステルの隣で見守っていたヨシュアの顔色が変わっていた。ひどく動揺しているように見える。

「ヨシュア、どうしたの？」

「ありえない……。そんなこと……、……あるわけがない……」

「ちょっと、ヨシュアってば、どうしちゃったの⁉」

　少し青ざめているように見えるし、呼吸が荒かった。

「あ……。だい……じょうぶ。なんでもないよ。見事な太刀筋だったから、ちょっと見とれちゃって……」

「そ、そうなの？」

　とてもそうは見えなかったがヨシュアは大丈夫を繰り返した。

「フ……。さすがヨシュア君。感受性が豊かで結構なことだ」

　オリビエが言ったが、エステルとしては心配な気持ちのほうが先に立つ。

「調子わるかったら言ってね」

「もう平気だよ……」

　控室から出るときには元の顔色に戻っていたので、エステルはそれ以上は心配することができなかった。

　遊撃士協会への報告があるからと、その日の夕食はジンやオリビエとは別に取ることになった。

　支部に戻ると、受付にはいつも通りにエルナンがいて、エステルとヨシュアは、その日に見てきたことを伝える。情報部の四人が大会に出ていること、四人を率いている少尉をレイストン要塞で見ていること。

　エルナンは眉を寄せて厳しい顔つきになった。

「そうですか、特務隊が……」

「なんであいつらが大会に出てきてんのかしら」

「毎年王都で開かれるこの武術大会には王国軍の強さを宣伝する目的もありますからね。王国軍や国境警備隊からのえり抜きが参加すること自体は割とあることなんです。ですが……このタイミングで、となると意図は判りかねます。表舞台に出てきた、ということかもしれませんが……」

「つまり、あいつらの目的はほぼ達成されている、ということですね」

「そうなりますね」

　ヨシュアの問いにエルナンはため息とともに答えた。

　もしかしたら自分たちがやっていることは何もかも手遅れなのではないか、焦燥感がエステルの胸に押し寄せてくる。

　支部を出て、ホテルに戻った。まだ夕食を食べていないことを思い出し、食堂に向かおうとした

エステルとヨシュアの背中に声がかかった。
「や～っと帰ってきやがったか」
くたびれたような声だ。聞き覚えがある。
振り返ったエステルの目に、着崩れたスーツに咥えタバコの男が映る。だらんと緩めたネクタイをそれでも窮屈だとばかりに引っ張りながら男が、挨拶代わりにぱちっと器用に片目だけを閉じてみせる。
「お久しぶりです、ナイアルさん」
ヨシュアが言った。
リベール通信の敏腕記者ナイアル・バーンズだった。
「何よ、あたしたちをわざわざ訪ねてきてくれたの？　そんなわけないか」
「またネタ探しですか？」
「かーっ！　なんと嘆かわしい。旧交を温めようというお兄さんの真心が伝わらないとは……って言ったら信じるか？」
エステルとヨシュアは仲良く首を横に振った。
「ちっ。相変わらず食えねえガキどもだな。まあいい。ちょっと付き合え」
「当然、奢ってくれるのよね？」
「ぐ。まあいいだろ。編集部の近くに行きつけの店がある。そこなら、いくらでもお代わりしていいぜ。その代わりに――」
いいネタがあったら教えろよ、と言ってくる。
エステルとヨシュアは頷いてみせた。確かに新聞記者が喜びそうな大ネタを自分たちは持っている。ただし――話すことができるかどうかはまた別問題だったが。
エステルたちの掴んでいるネタは、国家を揺るがすほどの大事件で、迂闊に知ることは事件に巻き込まれることを意味するのだった。

† † †

リベール通信社の編集部が入っている建物の向かいだというその店は、コーヒーと、カレーという料理で有名な小さな喫茶店なのだという。
実際、美味しかった。
「トロッとしたバラ肉とホクホクしたジャガイモがなんともいえずマッチしてて……辛いんだけど、なんていうのこう……ええと……美味しかった！」
「グルメ料理記事の記者にならなくてよかったな」
ナイアルの突っ込みも気にならない。だって、正直な感想ってそういうものよね、と思うのだ。
終わってからもエステルは味を思い返して笑顔になってしまう。
初めて食べたが、エステルはこの料理が好きになりそうだ。
「コーヒーも絶品だったよ」

「記者の薄給ももうちょい配慮してくれりゃ嬉しかったがな。人のミラだと思いやがって……」
「まーまー。とりあえずご馳走さまでした。で、やっぱりネタに困ってるわけ？」
「フン。あるにはあるさ。あるんだけどよ……」
　そう言ってナイアルは店の外へと視線を投げた。窓の外の空はもう真っ暗になっている。
「書けねえんだよなあ」
「何か問題でもあるんですか？」
　ヨシュアが尋ねた。
「信憑性の乏しい情報しかねえんだよ。女王の親衛隊がテロ事件を起こしただの、そのアリシア女王陛下が健康を損なって静養中だの。どれも噂話の範囲でしかねえ。しかもそういった情報のほとんどは軍が流してきたもんなんだぜ」
「それじゃダメなの？」
「偏った情報源（ソース）からのネタなんぞ、役に立たねえよ。信頼を担保するのは複数個所からの情報提供だ。クロスチェックもかけてねえ記事なんぞ書けるかってーの」
　そこでぐいとコーヒーを呷る。冷え切っていたらしく、苦さに顔を顰めた。
　エステルとヨシュアは思わず黙り込んでしまった。
　しばらくナイアルは窓の外を見つめていたが、不意に向き直るとこう切り出してきた。
「ドロシーからツァイスでの件を聞いたんだけどよ」
　きた、とエステルは思った。ナイアルは最初からあの誘拐事件について聞きたいと思っていたに

違いない。
「単刀直入に聞くぞ。おまえたち、リシャール大佐の尻尾を掴んでるか？」
「ホント、直球ねえ」
　だが、そう聞いてくるということはナイアルはツァイスの誘拐事件の黒幕がリシャール大佐だと知っている、もしくは予想しているということだ。
「王都では大佐の人気が高い、と聞きましたが？」
　ヨシュアがそれとなく話を振った。
「ああ。それもよりによってウチの雑誌でインタビューした記事をきっかけにして、な」
「そうだったんですね」
「いま王都で信じられている話はこうだ。女王の親衛隊が反逆し、王国のあちこちでテロ事件を起こしている。先のツァイスで起きたラッセル博士の誘拐事件も親衛隊のテロ事件の一つだ。中央工房から姿を消した誘拐団は、親衛隊の制服を着ていたというからな」
「それは……」
　そんな話になってしまっているのか。
「女王陛下が倒れたのも親衛隊の反逆に心を痛めたからだって噂だ。軍は即座に倒れた女王陛下の代理としてデュナン公爵が政務に当たると声明を出したが。ここで俺はおかしいと思った。ぶっちゃけ、あんなボンクラに政務ができるとは思えねえ。実際、女王陛下の仕事の大半はリシャール大佐が行っているっていうからな」

「ボンクラって……ナイアルってば」
「事実だろ。毎日のようにアリーナに入り浸ってるじゃねぇか」
ナイアルは続ける。
「で、俺はどうもきな臭いと思ってたら、王都に戻ってきたドロシーが言うには、博士をさらった船はレイストン要塞に降りたらしいじゃねえか。そのとき要塞にいたのは情報部の連中だ。情報部のトップはリシャール大佐だから、ってことは誘拐事件の主犯も大佐ってことになる」
さすがは敏腕記者だった。わずかな手がかりから真実へとまっすぐに迫っている。
「軍は、反逆者となった親衛隊は全員捕まえると宣言した。あちこちに検問を張りまくっているし、情報収集の名目で、俺たちが手に入れたネタは即座に没収だ。けど、どうやら捜索はうまくいってねえみたいだな」
そこで間を置いて言う。
「お前さんたちがここにいるってことはさ」
エステルとヨシュアはふたたび口を閉じてしまった。
互いに視線を交わし合う。
「ただ、判らねえこともある。たしかにリシャール大佐は情報部のトップだが、軍には他にも有力者がいる。例えば――ハーケン門にいるモルガン将軍だ。あのあたりのお偉方なら情報部の独断専行なんぞ抑えられるはずなんだが……」
「うーん、それはねぇ。ねえ、ヨシュア。話しちゃってもいいかなあ?」

「そうだね。ナイアルさんだったら協力してもらってもいいと思う」
ヨシュアの言葉を聞いて、ナイアルはテーブルの上に身を乗り出してきた。
「おいおいおい！　お前たち。やっぱり何か知ってやがるのか?」
「あらかじめ言っておきますけど……今から話すことは、記事にしたくても出来ないような内容だと思います」
「心の準備、しといてよね」
エステルたちは王都に入る前に掴んだ情報をナイアルに話すことにした。
話しているうちにナイアルの表情はどんどん険しいものへと変わっていった。眉間に皺がより、最後には頭を抱えてテーブルに突っ伏してしまった。
「おいおいおい。そりゃマジか……」
「だから心の準備をしておいてって言ったのに」
「けどよ」
「残念ながら本当です」
「ボースで起きた空賊事件を背後から操っていたのは情報部の特務兵なのよね。あたしたちは、カプア一家のふたりが湖畔で黒装束の奴らと会っていたのを見てるの」
ヴァレリア湖畔でボートでやってきた黒装束たち。あいつらがラッセル博士を誘拐したのも見た。そしてレイストン要塞のなかでふたたび出会ったときに、彼らが情報部の特務兵だということを知ったのだ。

　ナイアルがうめくように言う。
「で、軍の上層部は弱味を握られ、モルガン将軍は監禁状態……だと？」
「はい。さらにテロを自作自演した上で女王様の親衛隊の仕業に偽装しました。これで、実質的に王国内で大佐に逆らう勢力は一掃されたことになります。女王様の静養と公爵の代理就任もひょっとしたら……」
「陰でリシャール大佐が仕込んでるかもしれねえってのか……」
「ええ」
　ヨシュアの話し方は最初から最後まで淡々とだったが、それが言葉の真実味を増しているようだった。
「チクショウ！　たしかにこいつは記事には出来ねえ……ゲラがあがった段階で検閲に引っかかってお蔵入りだろうさ。今だって仕方がねえから当たり障りのねえ武術大会の記事なんぞで埋めてるわけだが……って、そうか。お前らが大会に参加してるのも理由があるんだな？」
「まあ、そうなんだけど」
「狙いは……優勝賞品の王宮晩餐会への招待状あたりか」
　エステルとヨシュアは答えない。だが、その沈黙をナイアルは肯定と取ったようだった。
「そうかよ……。よし！　じゃあ、俺も一枚噛ませろ」
「いいの？　かなり危険よ？」
「くどい！　ペンは剣に負けるわけにはいかねえんだよ！　蛇の道は蛇って言ってな、お前たちじゃ調べられないことを調べてきてやろうじゃねえか。おい、何か知りてえことはないか？」
「うーんと、親衛隊の人たちはもうぜんぶ捕まっちゃったのかとか、モルガン将軍はどうなってるのかとか、かな」
「なるほどな」
　ヨシュアが少しためらいを見せつつ口を開いた。
「情報部の人間の経歴は調べられますか？」
「経歴だと……？」
「はい。具体的には、中心人物と思われるリシャール大佐とロランス少尉です」
「少尉って……あ、あの赤い仮面のやつね！」
「敵を知り、己を知らばってやつか。なるほど、判った。経歴程度なら機密情報とも言えねえだろう。調べてやるよ」
「お願いします」
「その代わり、お前たちが優勝して城に招待されたら、色々と話を聞かせてもらうからな」
　対価を忘れないのも敏腕記者らしいところだった。

† † †

　翌日の昼。エステルたち四人は東側の控室で試合の開始を待っていた。

本戦の二日目だから残っているチームは四つだけ。つまり、東と西の控室にそれぞれ二チームずつが待機しているはずだった。
「もうすぐ始まるのに、もう一組のチームが来ないわよ？」
訝しむエステルにヨシュアも頷く。
「たしかに妙だね」
「えっと、残ってるチームって、あれよね。クルツさんのチームと特務兵の奴らと……」
「カプア一家。あの空賊たちだ」
「ほう、あいつらを知ってるのかい？」
ジンに問いかけられ、何故かオリビエが「わりとね」と答えた。それでエステルも思い出した。《霧降り峡谷》に隠されていたカプア一家のアジトに乗り込んだときって、シェラ姉だけじゃなくて、オリビエもいたんだっけ。
（たしかに腐れ縁かも……どこにでも出てくるもんね、このヒト）
エステルの視線の意味に気づいているのかいないのか、オリビエは胸を張って堂々と捲し立てる。
「ボクたちは彼らと一戦を交えたことがあるのさ。あれは『霧降り峡谷の闘い』として後世に語り継がれるほどの激しい戦闘でね――」
「まーた、そんなでまかせを！」
「漂白の詩人たるボクの瞳に映った真実を伝えようとしているだけだよ」
「いちど取り替えてみたほうがいいわよ、そんな濁った目」

「ヒ、ヒドイよ、エステルくん」
「ああ、来たみたいだよ」
益体もない会話を断ち切るようにヨシュアが言った。
遅れて入ってきたもう一組のチームは噂していた空賊たちだった。
「てめえらか……」
空賊たちの親分――たしかドルンという名だ――がエステルたちを睨みつけてくる。
他の三人も揃って顔を顰めた。エステルたちは彼らが捕まるきっかけを作った相手だから無理もない。最初こそ王立学園の清楚な生徒に化けていたジョゼットも、エステルを見て思い切り舌を突き出してきた。
「ふーん、今日のお相手はお前さんたちじゃ無かったか」
空賊の青年が如何にも残念そうな口調で言うと、背後から咎められた。
「おい！　おまえら、無駄口を叩くんじゃない。公爵閣下の温情があって参加していることを忘れたか」
空賊たち四人の後ろから軍の兵士たちが入ってきたのだ。
「あんたたちも、こいつらとは、なるべく口を利かないでほしい」
兵士はエステルたちにも忠告してくる。
監獄に収容中だった空賊団を、さすがに見張りなしに大会に参加させるわけもなかったということだ。カプア一家がぎりぎりまで控室に来なかった理由も、少しでも自由な時間を彼らに与えたく

なかったから――かもしれない。
兵士たちはエステルとカプア一家が顔見知りだとまでは思わなかったようで、空賊たちが控室に入ると、「廊下には一個中隊の兵が警備についている。逃げられると思うんじゃないぞ」とだけ言い置いて出ていった。
出口を塞いでしまえば逃亡はできないと思っているのだろう。
エステルとカプア一家の四人は互いにしばらく睨み合っていたが、どちらからともなく視線を逸らした。
ヨシュアがカプア一家の親分、ドルンに近寄った。
「大会に参加を決めたのは特務兵たちと戦うためですか？」
「えっ⁉　どういうこと？」
思わずヨシュアを見てしまう。ドルンもはっとした顔になっていた。図星を突かれたという表情だ。
「この人たちがヴァレリア湖で黒装束の連中と何か取引していたのはエステルも覚えてるだろう？」
「うん……で、黒装束って特務兵たちだから……あ！」
ようやく思い出したのだ。
その後、霧降り渓谷にあったカプア一家のアジトに潜入した。
誘拐されていた人質を救出し、カプア一家を追いかけたのだが、エステルたちをまるで先回りするかのように現れたのが王国軍の……。

「あんたたちを捕まえたのって、取引相手だったリシャール大佐じゃないの！」
「あいつら、味方のフリして俺たちを使い捨てやがった！」
ドルンが吐き捨てるように言った。
「まあ、だまされた俺たちもマヌケといえばマヌケだけど……」
苦々しげにそう付け足したのは先ほどの青年だ。脇にいるジョゼットから「キール兄」と呼ばれていた。どうやら彼女の兄らしい。
「この大会にゃ、軍からの選抜チームも出るってのは前から言われてたからな。公爵閣下様の気まぐれに付き合う気になったってわけさ。一発くらい、かましてやらにゃ気が済まねえ……」
燃えるような瞳をして、ドルンはそう言った。
「ドルン兄貴をおかしくしたのもあいつらにちがいねぇ！」
キールが言った。
そういえばドルンは、自分が定期飛行船の乗っ取りを命令した、ということを覚えてなかったのだ。
エステルにはまだ聞きたいことがあったのだけれど、そのとき導力拡声器から大会二日目の案内が流れだした。
『本日の最初の試合、本戦第五試合のカードを発表します』
はっとなって訊き耳を立てる。
呼ばれたのはジンの――エステルたちのチームだ。しかも、対戦相手はカルナたち正遊撃士から

なるチームだった。
　どちらかが決勝まで残ればと思っていたが、まさか準決勝で当たってしまうとは思わなかった。
「あ……ということは」
　対戦相手は直前まで秘密だ。だが、もう四組しかチームは残ってないのだから、ドルンたちの相手が誰か判ってしまう。
　空賊たちが戦うのは、あの仮面のロランスが率いる特務兵のチームだ！
「よーし、お前ら、俺たちの相手はあいつらに決まったぜ」
　ドルンがにやりと笑みを浮かべた。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.125

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/